明日に生きる

ー作文コンクール入選作品集ー

第３２号

令和３年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

　この絵は、私たちの生活は人の支えによって成り立っていることを表現しました。現代の私たちの生活はとても便利ですが、その裏ではたくさんの人々の技術や知恵、苦労によって今の生活があることを忘れてはいけません。
　また、水彩で淡く仕上げたところは、希望を表しています。

江戸川区立松江第五中学校
3年　吉　岡　綾　香

明日に生きる

第三十二号

―作文コンクール入選作品集―

明日に生きる　―作文コンクール入選作品集―　第三十二号　目　次

講　評

			ページ
作文選考を通じて	中学校の部	選考委員長（江東区立深川第一中学校長）　佐川明夫	1
作文選考を通じて	高等学校・専修学校等の部	選考委員長（東京都立農業高等学校長）　齋藤義弘	2

中学校の部

					ページ
最優秀賞	地域社会の一員として	東京都立武蔵高等学校附属中学校	三年	二宮理緒	3
優秀賞	人間ならではの良さ	足立区立江南中学校	二年	田島夏子	5
優秀賞	生産者が見える食品と産業	江戸川区立松江第五中学校	三年	西尾心々和	6
優秀賞	創ることの喜び	町田市立真光寺中学校	三年	海野愛乃	7
佳作	技術の授業から学んだこと	中央区立銀座中学校	三年	谷野　歩	9
佳作	職業とロボットの今、そして未来	中央区立銀座中学校	三年	山下美京	10
佳作	今の時代こそ知るべきこと	墨田区立寺島中学校	三年	桒原杏佳	12
佳作	理想の未来の実現のために	大田区立大森第六中学校	三年	上村　結	13
佳作	私の先輩	大田区立大森第六中学校	三年	林　佳菜子	15
佳作	一人のメリットとデメリット	大田区立六郷中学校	二年	木原心咲	16
佳作	将来の夢	大田区立六郷中学校	二年	矢野愛歩	17
佳作	縁の下の力持ち	北区立赤羽岩淵中学校	三年	石原佳菜子	19
佳作	技術部での経験を通して得たもの	北区立赤羽岩淵中学校	三年	中山真里	20
佳作	父への贈り物	北区立赤羽岩淵中学校	三年	三浦駿弥	22

佳作	人のつながりから夢へ	北区立桐ケ丘中学校	二年 片寄 優菜	23
佳作	学ぶ、そして成長	足立区立千寿桜堤中学校	二年 内田 祐椛	25
佳作	書道	調布市立第八中学校	一年 増田 りん	26
佳作	食生活と日本の未来	町田市立真光寺中学校	二年 井上 美青	28
佳作	肉じゃが作り	町田市立真光寺中学校	三年 澤野 由梨佳	29

高等学校の部

				ページ
最優秀賞	実習を終えて	愛国高等学校	三年 齊藤 絵舞	31
優秀賞	女性養豚経営者を目指して	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年 岩倉 綾野	32
優秀賞	大島×デザイン＝夢	東京都立大島高等学校	三年 山口 雅人	34
佳作	子どもたちの明るい未来の実現に向けて	東京都立農業高等学校	二年 樋谷 咲良	36
佳作	私自身と夢の成長	東京都立農業高等学校	二年 松葉 晶代	37
佳作	お弁当開発と販売実習から得たこと	東京都立八丈高等学校	一年 持丸 瑠菜	39
佳作	東海上の花彩島～花が彩る島に～	東京都立大島高等学校	三年 山口 海人	40
佳作	当たり前	東京都立葛飾商業高等学校	三年 篠原 瑞稀	42
佳作	世のため、人のための料理店	東京都立江東商業高等学校	三年 小山 鳳虎	43
佳作	未来へ向かう	愛国高等学校	二年 北村 愛心	45
佳作	将来について	愛国高等学校	三年 永田 郁月	47
佳作	実習を通して	愛国高等学校	三年 濱口 瞳	48
佳作	障害と向き合う	京華商業高等学校	二年 鈴木 千夏	50
佳作	私の目指す教師像	京華商業高等学校	三年 矢野 和加菜	52

専修学校の部 ページ

優　秀　賞　アスリートの活躍を食で支える現場体験　二葉栄養専門学校　一年　森　下　さおり　54

イラストの部 ページ

イラスト賞　江戸川区立松江第五中学校　三年　吉　岡　綾　香　56

表彰式（令和3年12月17日、東京商工会議所）　56

令和3年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）　57

応募校数・応募者数・入選者数の推移　58

作文のテーマ別応募者数一覧　59

令和3年度作文コンクール作品募集ポスター　60

令和3年度作文選考委員名簿　61

あとがき　62

講評

作文選考を通じて

中学校の部　選考委員長
江東区立深川第一中学校長
佐川明夫

今年度は二十五校から百二十二編の応募がありました。コロナ禍にあり、学習活動が制限される中で多くの作品を応募していただきました。一次審査、二次審査を経て、十九作品が入選し、最優秀作品一編、優秀作品三編、佳作十五編を選考いたしました。今年度の作品は、コロナ禍の影響もあり職場体験の作品がほとんどありませんでした。その代わりに、授業で学んだことがきっかけになり、自分の考えや夢が膨らんでいったことや、将来の夢に関する作品が目立ちました。家庭で過ごす時間が増えた中、気づいたことをテーマにする作品もありました。

今回、最優秀賞を受賞した二宮理緒さんの「地域社会の一員として」は、ボランティア活動を通して二つの気づきを述べています。一つめはボランティアの方たちはとても生き生きとしている点です。その理由として「人のために行動することは、自分のために行動するよりも幸せを感じられる」と述べています。二つめは「コミュニティーセンターで活動している人の年齢層が高く、その人たちの生きがいの場になっている反面、どの世代の人もボランティア活動に参加しやすい環境づくりをしていくことが大切である」と述べています。

今回の経験から「優しさ」や「人の助けになることへの喜び」を学び、ボランティアをすることの重要性を訴え、大人も考えさせる深い内容でした。

優秀賞の田島夏子さんの「人間ならではの良さ」は、ＡＩやロボットの技術が進む中で人間しかできない技術とは何かを考えました。技術・家庭科の授業を振り返り、将来の進路や仕事について考えを深めることができたと結んでいます。同じく優秀賞の西尾心々和さんの「生産者が見える食品と産業」は、食品の安全性と安心感を述べています。商品の情報を「見える化」することにより、ブランド化を図ったり、消費者の声を届けたりすることができる点に着目し、生産者と消費者との在り方を考えさせる作品でした。優秀賞の海野愛乃さんの「創ることの喜び」は、ものづくりができる施設を訪れ、そこでものづくりを体験して変わっていく自分を表現しています。おじさんの一言が自分を変え、今後のものづくりに期待がもてる内容でした。

今回は授業から学んだことや、将来の夢などたくさんの視点から述べ、自分の考えを広げ、読み応えのある作品が揃っていました。

最後に今回の作文コンクールに応募していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。また、御指導いただいた先生方、貴重な体験をさせていただいた地域・事業所の皆様、そして保護者の皆様に感謝申し上げます。

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部　選考委員長
東京都立農業高等学校長
齋藤　義弘

今年度は、高等学校の部に九十作品、専修学校の部に一作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞二作品、佳作十一作品、専修学校の部では、優秀賞一作品を選考させていただきました。

高等学校の部の最優秀賞は、愛国高校三年の齊藤絵舞さんの作品で、題名は「実習を終えて」です。

小学校高学年の時の祖母への対応、そして、中学校三年生の時の父を見舞いに行った日への後悔から、「必ず看護師になる。」と強く決意しました。その決意のもと、看護学生として日々勉学に励むなど、看護師を目指している様子が強く伝わってくる作品です。内容は次のとおりです。

新型コロナウイルス感染症予防のため、昨年度は実施することができなかった病院での臨地実習を、今年度は実施することができました。Ⅰクールめでの課題発見、Ⅱクールめでの「患者からの『有り難う。』という言葉で、自分も笑顔になれたこと。」など、看護師になるという目標に向かって誠実に歩み続け、一歩一歩確実に成長していると推察できます。

祖母や父の存在、そして患者の笑顔を胸に刻むとともに、患者を笑顔にできる看護師を目指して、努力を続けることを期待しています。

僅差でしたが、優秀賞は、瑞穂農芸高校二年の岩倉綾野さんの「女性養豚経営者を目指して」、大島高校三年の山口雅人さんの「大島×デザイン＝夢」の二つの作品です。

岩倉さんが「養豚家になり自分の農場を経営するという夢を叶えること」、山口さんが「故郷の伊豆大島に、誰でもが自然や農業を楽しむことができる場所を作ること」を心より願っています。

専修学校の部の優秀賞は、二葉栄養専門学校一年の森下さおりさんの作品で、題名は「アスリートの活躍を食で支える現場体験」です。「おはようございます！」から始まるこの作品は、リズム感があり、経験や体験等に基づいて記述されています。とても好感のもてる作品です。

さて、専門高校、専修学校等で学ぶ生徒・学生の皆さんは、自分の興味・関心のあることを専門的に学ぶことにより、将来、自分が進む道を見つけています。皆さんの学びは、人々の生活を支え、守り、豊かにしていきます。今の学びを大切にし、自信と誇りをもち、目標を必ず叶えることを期待しています。

結びになりますが、今年度の作文コンクールに応募していただいた生徒の皆さん、本当に有り難うございました。また、御指導いただきました先生方に感謝申し上げます。

中学校の部　**最優秀賞**

地域社会の一員として

東京都立武蔵高等学校附属中学校　三年
二宮　理緒

「この施設を利用するようになってから歩けるようになったんだよ。本当にありがたいねぇ。」

この言葉は、私の住む武蔵野市にある「コミュニティーセンター」略して「コミセン」に通う、あるおばあさんと話していた際に言われた言葉です。私はこの言葉を聞いて、改めて地域交流の場とそこで働く方たちがいることの大切さを実感しました。

皆さんは、コミュニティーセンターについてどれほど知っていますか。名前を聞いたことのある人は多いかもしれませんが、詳しく知らないという人がほとんどだと思います。一般的に、コミセンは地域の社会文化活動の中心となる、各種公共施設の総称のことです。武蔵野市のコミセンは、「自主三原則」と呼ばれる地域の人の自主参加・自主企画・自主運営で成り立っています。そのため、運営に参加してみたいと思った市民であれば、誰でも携わることができます。

私の母もコミセンの運営に携わっており、私も施設を利用するだけでなく、地域住民の交流を目的とした「コミセン祭り」などの行事を手伝った経験があります。その中で感じたことは、大きく分けて二つあります。

一つめは、そこで働く人々、運営や行事に携わるボランティアの方たちがとても生き生きしているということです。例えば、コミセン祭りを行うとき、何度も会議を重ねた後、前日の朝から設営や食品の調達をします。その姿を間近で見た私は、あるボランティアの方に、「大変そうですね。」と声を掛けたことがあります。すると予想に反して、「皆でお話しをしながら、地域の人がどのようにしたら喜んでくれるのかを考えるのが楽しいからまったく大変ではありませんよ。」という答えが返ってきました。振り返ってみると、私も祭りの手伝いをしているとき、大変さよりも楽しさを多く感じました。例えば、コミセン祭りで焼きそばの調理、販売担当として、チームで声を掛け合って作ったときのことです。普段関わることのない年代の人と話し、協力できたことは、私にとって楽しく、有意義でかけがえのない経験となりました。他にも、焼きそばをお客さんに渡すときに、「ありがとう」と一言返されるだけで喜びを感じ、それをきっかけに会話が生まれたときには温かい気持ちになりました。また、私たちの作った焼きそばを皆が美味しそうに食べている姿を見ると、努力の甲斐があったと感じ、もっと多くの人に喜んでもらいたいと思うようになりました。人のために行動することは、自分のために行動するよりも幸せを持続して感じられる、と聞いたことがあります。地域交流は訪れた人だけではなく、私たちボランティアも幸せにしてくれると実感しました。

コミセンの行事に携わる中での二つめの気づきは、コミセンで働いている人たちの年齢層が高いことです。仕事や子育

て、介護が落ちつき、自分の時間に余裕のできた人たちが地域のために活躍しています。そして、そのような人たちにとってコミセンという場が生きがいとなり「健康寿命」を延ばすことにつながっていると実感しました。このことは本人にとっても、地域社会にとっても良いことだと思います。一方で、時間に余裕のない若者や現役世代の人にとっては、運営に関わることが難しいという現状もあります。そのため、若い世代向けの行事は必然的に少なくなり、地域との関わる機会も減ってしまいます。このようなことから、どの世代の人も地域のボランティアに参加しやすいような環境づくりをしていくことで、新しい視点を取り入れ、コミセンを誰にとっても居心地の良い施設にすることができるのではないかと感じました。

冒頭で触れた、コミセンで私に声を掛けてくださった八十三歳のおばあさんは、ボランティアの方から声を掛けられて、七十九歳から卓球を習い始めたそうです。今までは家の周りを散歩することがやっとだったそうですが、週に二回、卓球の練習をすることが生きがいとなり、体力も付き、足腰も強くなったと嬉しそうに話してくれました。そして今ではボランティアの担い手として地域の行事にも参加しています。

これまでの地域交流の経験から、私は「優しさ」や「人の助けになることへの喜び」など、多くのことを学びました。残念ながら、現在、コミセンは新型コロナウイルス感染症の影響で以前のように活動ができていません。コミセンが再び地域の人々の憩いの場に戻ったときのために、私ができることーそれはより多くの人にボランティアになることの重要性と楽しさを広めることだと考えます。幅広い年代、特に、若い世代にボランティアとして働いてもらうことは、これからもコミセンが地域と人をつなぐ役割を担い続けることにもつながると思います。母が私にきっかけを与えてくれたように、私も地域活動の輪を広めていきたいです。まずは、友達に声を掛け一緒にボランティア活動をすることで、楽しさを知ってもらいたいと思います。

社会とのつながりを感じられる、地域での活動を通じて、社会の課題を解決できる人材が増えることを願っています。そして、その地域での産業や自治体との協力によって、より良く、より魅力的な地域社会の実現に一歩ずつ近づいていくことを信じています。ぜひ、皆さんにも地域社会の一員として、自分の住んでいる地域のことに興味をもち、交流の場に足を運んでみてほしいと思います。そうすれば、有意義で楽しい時間に出会えるかもしれません。

中学校の部　優秀賞

人間ならではの良さ

足立区立江南中学校　二年
田島　夏子

ＡＩやロボットなどの機械の技術が進む中で人間にしか出来ない技術とは何だろうか。現状、ほとんどの製品が機械によって作られている。また、人間も機械に頼っている。それは機械の方が効率も正確さも人間より優れているからだろう。

では人間は、製品の制作において必要あるのだろうか。これに対して私は、必要であるという考えをもった。なぜなら、人間は製品を作るときに、製品を使う相手のことを思って作ることができる。これは感情のある、人間にしかできないことであり、機械にはできないことである。さらに、一つ一つ手作業で作るということは、全く同じ物ができるとは限らない。多少の違いが生じる。しかし、それが人間らしく、温かみのある製品といえるのではないだろうか。伝統工芸品を例にあげて考えると、イメージしやすい。伝統工芸品には職人の、この製品の良さを伝えたい、この製品を通して地域についてもっと知って欲しい、などの思いが込められているだろう。また、手作業のため、多少の違いがあったり、二つと無い物が完成するだろう。私はそこに人間にしか出来ない良さ、というものを感じる。

私も技術や家庭科の授業で、何度か物作りを行ったことがある。特に家庭科では、何を目的として物を作り、誰のための物なのか、ということを考えて制作を行った。自分が使うために作るときは、実際に自分がそれを使っていることをイメージする。自分以外の人のために作るときは、相手が必要とするのは何か、相手がそれを使って喜んだり、笑顔になることをイメージする。そうすることで自分の生活が豊かになったり、嬉しい気持ちになることができる。そこにつくることへの喜びを感じる。その喜びが次の制作への意識や学習に向かう姿勢にもつながっていくだろう。

そこから私は、自分の将来への考え方を見直すことができた。物作りをする仕事、とまではいかなくとも、人のためになることや誰かに必要とされるような仕事をしたいと思った。私は誰かのために動くことが好きだ。相手に喜んでもらうことが自分のモチベーションを上げることにもつながるし、自分の喜びにもなる。そんな仕事なら続けていけるように思えるし、希望をもって進路を考えていけるように思う。正直、現時点では具体的にどんな職業に就きたいか、と聞かれても答えることができない。しかし、人のためになる仕事や必要とされる仕事は、ほとんどの仕事に当てはまる。そもそも必要とされているからその仕事が存在しているのだろう。だから私は今後、もっと具体的にやりたいことを考えたうえで職種をしぼっていこうと思う。

私は、技術や家庭科の授業を通して人間にしか出来ない、「思いを込めて制作する技術」と、将来の進路や仕事などについて考えることができた。この経験をこれからの授業での

制作や、自分の将来に生かしていきたい。

生産者が見える食品と産業

江戸川区立松江第五中学校　三年
西　尾　心々和

先日、私がスーパーマーケットに買い物に行くと、袋に生産者の名前が載せられた野菜が販売されていました。名前の他にも顔の写真やイラストが載せられていたり、生産者についての情報を読み込める二次元コードが貼られていたりと、近頃、私たち消費者が生産者を見ることのできる食品が増えてきています。なぜこのような食品が作られるようになったのでしょうか。私はこの疑問について調べることにしました。

まず私は、食品の安全性と安心感という視点で考えました。以前、家庭科の授業で食品の安全性について学んだ際、食中毒や基準値を超える残留農薬、食品の不正表示など、多くの安全に関する問題が発生していることを知りました。また、食品の安全を求めることは消費者の権利であり、そのために行動し、判断することが消費者の責任であることを知りました。このことから私は、生産者個人の情報が記載されている食品は、食品の安全性を高め、安心感を与える効果があるのではないかと考えました。理由として、名前や顔写真など、生産者に直接つながる情報を記載することで、商品への責任感を向上させる効果が期待できると思ったからです。また、記載された情報は、消費者が食品を選ぶ際にも役立ちます。以前、私の家では生産者の情報が載ったトマトを購入しました。そのトマトがとても美味しかったので、袋に書かれていた二次元コードを読み込むと、農家さんの農業に対する熱意や、トマトを育てる上での安全へのこだわりを動画で見ることができ、このトマトがさらに好きになり、「また買いたい」と思いました。このような経験から、生産者の情報を記載することは、食品の安全性を確かめることができ、消費者は安心してその商品を購入できることだと思います。また、その商品を気に入った場合、私のように、もう一度買いたいという気持ちになるため、安心安全に作られた商品がたくさん売れやすくなると思います。

次に私は「直売所」に注目しました。なぜなら、直売所は生産者が直接消費者に販売することから、生産者の情報が記載された商品と同じような効果があると考えたからです。私の学校の近くには、畑の野菜を売っている直売所があります。そこでは、「〇〇さんが育てた野菜だから」と生産者を信用して、繰り返し購入している人も多いです。このようなことからも、生産者が見えることは、消費者が安心安全に利用できることにつながっていると思います。さらに、スーパーマーケットなど他の場所でも、生産者の情報を載せて食品を販売することで、直売所と同じような生産者や地域とのつながりを感じることができています。このようなことは、より多くの人に地域の食品に関する活動を知ってもらう機会になり、味や品質だけでなく、その食品の産地や、携わっている人たちについても、目を向けてもらえるようになると思います。

そして、消費者の食品に関わる地域への関心が高まることで、近くの地域で生産されたものを消費する「地産地消」に注目する人が増え、食品の輸送にかかる環境負荷を減らしていけるのではないのでしょうか。

また、生産者の情報を記載することは消費者だけでなく、生産者にも良い点があります。

一つめは、自分の作ったものに「ブランド力」が付く点です。例えば、とても美味しい野菜を作っても、自分が作った野菜と、その他の野菜とを見分けて買ってもらうことは難しいです。そこで、生産者の名前などを記載することで「その人がつくった」ということをアピールでき、「美味しい」という好評が広まれば、お肉でいう「黒毛和牛」のようなブランド力を得ることができます。

二つめは、消費者の声を直接聞くことができる点です。前まで消費者の声は、腐っていたり、傷がついていたりした際に、売り場を通して伝わるクレームに限られていましたが、食品に載せられた情報から、消費者が生産者と直接やりとりができるようになり、生産者にとって嬉しい声も届くようになりました。実際に、消費者からのメッセージが届いた人や、自分の畑に来てくれた人から野菜の感想をいただいた農家の方もいるそうです。このような声は、生産者の方々にとって大きな励みとなり、より良い食品も増えていくと思います。

今回、私は生産者の情報を載せた食品について調べ、この活動は多くの良い点があり、また、産業全体の取り組みである「見える化」にもつながっていると思いました。なぜなら調べていく中で、産業の中でも色々な分野で、商品が販売されるまでの工程や流れが消費者から分からないことは課題とされていることを知り、生産者の情報が記載された食品はこの課題を解消する一歩になると考えたからです。実際に、私自身も産業について分からないことが多いので、生産者の情報が記載された食品を始めとした、「見える化」された商品を通して、消費者として正しい判断を出来るように産業について学んでいきたいです。

創ることの喜び

町田市立真光寺中学校　三年
海野愛乃

技術。家庭科。中学生。小学生だった頃の私にとって、この三つの言葉は「なんかかっこいい」「大人な言葉」でした。入学式の後に配られた技術・家庭科の教科書の重みは今でも覚えています。ワクワクとドキドキで詰まっていました。

さて、ここで正直に言います。私は何かをつくることが苦手です。大の苦手です。しかし、とても好きです。そう、好きと苦手は逆矢印では結べないのです！これはごく当たり前に聞こえるかもしれません。たしかに理屈でいくと、好きの反対は嫌い、苦手の反対は得意です。しかし実際に、何かについて考えてみた時、好きと苦手が同じ空間に存在することはまずありません。ものづくりは、得意不得意にかかわらず楽しめる、キセキなのです。

私の家の近くでは、職人さんの仕事を真似することができる施設があります。のこぎりややすりなど、基本的な道具がそろっている場所です。そこには小さい頃からお世話になっているのですが、何年か通っても果たせない目標がありました。それはズバリ、係のおじさんと話すこと。一見関係なさそうですが、ものづくりの下手な私にとって、上手な人に教えてもらうのは夢だったのです。ところが、私はどうしても話しかけられず、結果として、良いものがつくれないときにアドバイスをもらうことができないでいました。

そんなある日、私はいつものようにその施設に行くと、見慣れぬものを見つけました。それは、木で作られた包丁。持ち手には模様が彫られていて、そして刃は鋭く細くなっていながらも怪我をしない程度に丸められていました。一言で表すと、美しかったです。一つの木片から、こんなにも美しいものがつくれるのかと感動しました。そしてそのとき思いました。私も作ってみようと。

しかし、実際につくってみることと、完成品を見て何となくつくり方が分かるのとでは、違います。三時間かけてつくってみた二つの包丁はどちらも刀のようになってしまいました。とても包丁とはいえません。ため息をついていた時、沈みかけていた夕日をさえぎるようにして、黒い陰が私の前に立ちました。見上げると、そこにはあのおじさんが。驚いて声が出せない私におじさんは言いました。

「その包丁は君にあげよう。明日、またおいで。」

あの日以来、私のものづくりの人生は変わりました。おじさんと話せるようになった私は、アドバイスをもらっては上達するというサイクルに入れましたし、仲間の輪も広がりました。ちなみに、なぜあの時声をかけてくれたのか、おじさんに聞いてみたことがあります。答えは一言でした。

「熱中していたからだよ。」

ものづくりのパワーは偉大だと思います。誰もが楽しめる。喜びを体感できる。そしてそれを、分かち合える。おじさんには、私が木を包丁にしようとするのが、見ていて楽しかったそうです。

「自分も一緒になって作っているみたいだったよ。もどかしかったけどね。」

そう笑っていました。

ものづくりは楽しい、作りたい！と思うところが原点です。別に「下手の横好き」でも「好きこそものの上手なれ」でもいいのです。大切なのは、気持ちだと思います。

今、コロナウイルスが流行り、外に行けない状況となっています。おじさんにも会えていません。しかし、こんなときでも、ものづくりの風はやまないのです。折り紙。空の箱。庭の葉。材料は変わっても中身は変わらないのがものづくりだと思います。また、外出できるようになったら、おじさんにつくったものを見せたいです。きっと楽しいことでしょう。なぜなら、ものづくりは、モノを、仲間を、地域を創ることだから。

中学校の部　佳作

技術の授業から学んだこと

中央区立銀座中学校　三年
谷野　歩

私は中学二年生のとき、技術の授業で大根づくりをしました。はじめは、学校での栽培ということで当然外での作業だったため、暑い日には汗をかくし、プランターのまわりには見た目の気持ち悪い虫もたくさんいたし、手や制服も汚れたので二週間に一回ほどある大根づくりの授業が少し嫌でした。しかし、二回、三回、四回と回を重ねるごとに大根づくりの授業への意欲が高まっていきました。なぜなら、それまで大根づくりで嫌だったことへの気持ちよりも大根づくりで得る喜びの気持ちの方が大きくなっていったからです。特に自分の育てる大根がみるみるうちに生長していくのを強く実感できたことは大きな喜びでした。自分の手で一生懸命に育てる大根に愛着も湧いていきました。最終的には太くてずっしりとした立派に生長した大根を収穫することができ、おいしく食べることができました。

私はこの技術の授業を受ける前は、農業という職業にあまり興味がなく、これといった印象はもっていませんでした。しかし、授業の大根づくりを通して農業という職業にはたくさんの魅力がつまっていることに気がつきました。

一つめは、大きな達成感が味わえるということです。作物を育てるということは決して容易ではなく、肉体的にもとても大変であり、自然が相手なので、アクシデントは付きものです。さらに、作物は一朝一夕でできあがるわけではなく、数ヶ月かけて栽培するものがほとんどです。しかし、これだけのことを乗り越えて無事収穫できたときの達成感はとても大きいものだということがわかりました。また、自分のがんばりが育てた作物の見た目や味など目に見えるかたちで表れやすいという魅力にも気がつきました。

二つめは、作った作物が消費者から評価されるということです。私も収穫した大根を家族に食べてもらいおいしいと言ってくれたときはとてもうれしかったです。農家の人が自分の自慢の作物を市場に出して、高い評価を受けたり、人気を集めたりすることはうれしいにちがいないと思いました。他にも、農業は自然を相手にする仕事ということで、都会で働いていれば絶対に気がつけないような発見や感動が山ほどあるのだろうと思い魅力的に感じました。

しかし、そんな農業にもたくさんの問題があることに調べて気がつきました。特に食料自給率の低下と農業従事者が減少しているという問題は密接に関わっていることがわかりました。現在の日本は、食料自給率が先進国の中でも極めて低く、農作物もたくさん外国から輸入しています。外国の作物はいくら関税がかかるとはいえ、安く輸入されるため、消費者は国産ではなく輸入された外国産のものをよく買うようになってしまっています。その影響で日本の農家の作った作物は売れなくなってしまい、多くの農家は経営が苦しく、儲か

らないため農業を止めて別の道で生計を立てたり、親が農家であっても、農業を継がずに別の職に就く人が増えているのが現状です。このように新規参入者にはハードルが高く、既存の農家から離農者が多く出ている状況が長年続いているため、農業従事者の数が減少し続けています。

私は、輸入に依存してしまうともし輸入が何らかの理由でできなくなってしまったときに、その作物の値段が高騰し、消費者の生活が苦しくなってしまったり、海外のものであるという安全性の観点から私たちはこの状況が深刻であることを理解し、早急に解決へ向け協力していくべきだと思いました。

私は技術の授業から農業について初めて詳しく調べ理解することができ、自分にできることは何なのか考えることができました。また、それと同時に職業についてまだ知らないことが山ほどあると改めて実感したので、自分がどんな職業に就きたいのかを考えながらいろいろなことについて調べてみたいと思いました。

職業とロボットの今、そして未来

中央区立銀座中学校　三年
山下　美京

スマートフォン・テレビ・ロボット掃除機などの道具で、より便利で、より豊かになった私たちの生活。周りは自動で動くものばかりになった。どれもボタン一つ押すだけで動き出し、それが今の時代の「当たり前」となっている。誰もその当たり前を疑わず、私自身も、スマートフォンを眺めて「どうしてこう動くんだろう」と考えたことは一度もない。

少し前までは、単純で簡易的なつくりのものがほとんどで、つくりが見えるようなものが多かったため、仕組みを熟知しているような利用者だってたくさんいたはずだ。しかし、今は便利化に比例するようにつくりが複雑になり、熟知どころか中身を見ようとする気には、私を含めてほとんどの人がならないだろう。そうすると、世の中の子供や若い人たちが機械にふれたり、機械の仕組みに興味をもつことが減ってくる。世の中がそんな人々でいっぱいになれば、今私たちが存分に恩恵を受けている技術の発展も止まってしまうかもしれない。

そんな中で、私たちが受けた「プログラミング」の授業は、動くものの仕組みを根本から考えるきっかけとなった。プログラミングでは、自分でブロックを動かしてキャラクターの動きや形、色などを指定し、思い通りに動かす大変さを学んだ。特に、一つでも条件が違うと、キャラクターが逆方向に

進み出したり、動かそうとしているのに微動だにしなかったりと、思い通りに動かないのは、初めての体験だったのでとても驚いた。

そんなプログラミングの授業を受けてみて私は、「このボタンを押すとこの部分がこの回り方で動くんだな。」「もしこの指令が上手く伝わらなかったらどんな風に動いていたのだろう。」と、ものの動きに興味や疑問をもてるようになった。そして、プログラミングと密接に関わる「ロボット」について興味をもった。その中でも特に「職場で活躍するロボット」について調べてみた。最近、ほとんどの業種でロボットが導入されている。工場ではものづくりのロボット、災害現場などの危険な場所に人の代わりに入るロボット、医療現場で手術を助けるロボットも存在する。それらのロボットは手順通りに動くように、プログラミングされている。ボタンを押して動くようなものも「このボタンを押されたらここを動かす」というプログラムが入っていることもある。

また、私の将来就きたい職業である「薬剤師」にもロボットが導入されていることも知った。現在の薬剤師の仕事は、医師から出た処方箋を基に薬を処方する、薬の飲みあわせなどについての相談にのる、薬を調剤する、などが主な仕事内容だ。ただ、この「処方箋を基に調剤し、薬を処方する」というのが実は簡単なことではない。薬局内に何百種類とある薬の中で処方箋に書いてある通りのものを正確に調剤して、正確な人数分出して間違いのないように説明して処方する。薬は少しでも量や種類を間違えたりすると、人の命に関わる一大事につながりかねないため、何があっても正確に調剤・処方しなければならない。しかしそれは薬剤師も人間なため不可能に近い。そこで導入されたのが調剤をするロボットだ。このロボットは、薬剤師の代わりに調剤を行い、個包装にして薬剤師のもとに届けてくれる。今まで薬剤師が行っていた調剤がロボットで行われることによって、調剤ミスは間違いなく減ったと言われている。より安心安全になった。

また、薬剤師が今まで調剤を行っていた時間が空くことで、患者とのコミュニケーションをとる時間を増やすことができた。患者からの薬に関する相談にのったり、服薬指導をより丁寧にしたりと、患者と話して服薬状況を知ることは、治療の改善などに大きく役に立つと思う。

このように、薬局に調剤ロボットが導入されたことは、薬剤師にとっても患者にとっても大きな利点となった。調剤ロボットは、これからより多くの現場に広まっていくべきだと思う。

これまで述べてきたように、今の時代は複雑な機械に対応できる人が少なくなっている中で、これからを担う若い世代の人々が「プログラミング」などを習得することは、未来の技術の発展に大きく貢献するだろう。

また、私たちのように小中学生からプログラミングやロボットなどの技術分野を学習することで、ものの動きの仕組みや社会で使われる技術に興味をもつことができるようになるかもしれない。私のように機械に興味のなかった子が興味をもつきっかけになるかもしれない。そうすれば、私たちの未来も技術によってより豊かなものとなるのではないだろうか。

今の時代こそ知るべきこと

墨田区立寺島中学校　三年
桒　原　杏　佳

技術の授業では、一年生のときにはシャッター付き小物入れの制作をしました。三年生になった今は、プログラミングの学習をしています。一年生では、沢山の種類の木の板が入っているキットがありました。それぞれが部品になるために木を切ったり、形を整えたり、組み立てたりと、初めはただ自分の手でものを作るということにワクワクの気持ちでした。使う道具は扱いが簡単でないものが多く、危険が伴うものがたくさんあり、ただ楽しく作るだけではいけないことが分かりました。使い方を事前に授業で学び、誤った扱いをしないようしっかりと確認し、新しく知識を得ることができました。ですが、道具を正しく使っても作品は上手く仕上がらなく、そこからどうしたら使い勝手が良くなるのかを考え、工夫していきました。そして、そこがものづくりの醍醐味なのではないかと感じました。また、手際の良さも大切になってくるため、より早く丁寧に作り上げることが必要でした。私はそこからものづくりを仕事にしている人が、たくさんの工夫をして、よりよくしていっていること。使う時を考えながら制作していること。そして一つ一つ気持ちをこめて、作っているということを知りました。また、そのやりがいは私にとっても、私達にとっても必要なことではないかと思いました。

私達がプログラミングの学習をしていることが、時代の流れを表しているように、今は機械化や情報化が進んでいます。それにより、ものづくりをしている人の減少や生活の苦しさのようなものは、私も聞いたことがあります。今まで人間が行っていた、ものづくりという仕事を、どんどん機械が奪っていっているからでしょう。これは、日本や世界の技術が向上しているということなので勿論悪いことではないと思います。私はかつて、安く気軽に手に入れることができるものが良い、と思っていました。ですが、機械で作られた製品と一人一人思いのこもった手作りの作品のどちらにもそれぞれの良いことがある、とこの授業で感じることができました。しかし、以前の私のように手作りの作品の良さを知らない人も沢山いるのではないかと考えました。そして、今回私はその経験を経て実際に良さを知ることができたので、多くの、他の人にも知ってほしいと思いました。

私の周りには、働いている人が沢山いるため、仕事というのは身近に感じていました。私の祖父は服を作る仕事をしています。デザイナーさんがデザインしてくれたものを、形にする仕事です。中でも祖父は、特別にコレクションなどに発表するための服を作っています。祖父の家の一室には仕事場があります。幼い頃から祖父母の家へ遊びに行くと、必ずその部屋に行き、服を作っている様子を見ていました。完成した作品を見ただけでは、服の一部がどのように作られたのか、分からないほどとても細かく作られています。幼い頃は、ただただそれが、すごいという漠然とした感想しかもてませんでした。

しかし、大きくなって技術の授業で感じた出来事が祖父の仕事に結びつきました。そこから、一部一部を作るために注ぐ気持ちがあることや、一つ一つ考えて作られていることが分かり、とても貴重な作品になっているということに圧倒されました。また、そのような作品の良さがあまり世に知られていないことに勿体なさを感じました。たしかに、安く簡単に手に入れることのできるものはとても魅力的なものです。ですが、ものを使っているときに作った人の想いや温かみが伝わってくる作品は、他と違って唯一の貴重なものだと思います。そこからやる気が出てきたり、裏側を考えて作品作りの努力の様子や状況を知ったりすることができるからです。それを知らない人や、あまり考えずに生活している人。また、良さが分からない人には、改めて伝える必要があると思います。私は幼い頃から祖父を見てきて、その仕事をしている姿に格好良さを憶えました。そして、授業で考えたことと結びつけたとき、私も自分のこの手でものを作り続けていきたいと思いました。その話を祖父にしたとき、今は手作りのものを作って、そのお金で生活していくのが難しい時代だと言っていました。それを聞いて、やはり、私は、手作りのものの良さが浸透していない証拠なのだと思いました。

今は、情報通信技術なども大きく発達しています。私の周りでも電子機器を使う場面も多く、これからはそれを使いこなす力も生きていくために必要だと思います。そして、それは簡単に他人に情報を発信できる優れたものです。ですので、私はその技術を上手に使いながら、手作りの作品の良さを世に発信していきたいです。世界中の人と繋がることができる今のこの時代だからこそ、技術を駆使して周りの人と情報を交換することが大切だと思うからです。そこから、沢山の人が職人さんの手によって作られたものに魅力を感じて、興味をもってほしいです。そして私は、最新の技術によって作られる製品と、一つ一つ手で仕上げられる作品と、どちらも私の生活に大切になるものにしていきたいです。

理想の未来の実現のために

大田区立大森第六中学校　三年
上村　結

私には、現在熱中して取り組んでいる趣味があります。それは韓国語の学習です。

幼少期から英語のアニメを見たり、家族と英語で簡単な会話をしたりと、語学学習と身近な環境にはありましたが、韓国語に興味をもったのはつい四年前のことです。

韓国や韓国語に興味をもったのは、小学五年生の時に学校で韓国のアイドルの楽曲が流行したことがきっかけでした。日本のアイドルと違い、歌もダンスも高い実力を兼ね備えており、ステージで堂々と輝いている姿に魅了された私は、好きなアイドルの歌を私も歌えるようになりたいという気持ちで韓国語を勉強し始めました。

本格的に韓国語の学習に取り組み始めたのは小学六年生の時でした。始めた当初は、文字の読み書きだけでも苦労し、日本の文字の仕組みと全く違うハングル（韓国の文字）の仕

組みにとても混乱しました。しかし、学習を進めていくと日本語と似ている部分も多くあり、一つ一つ文法や単語を習得していくたびに強い達成感を感じ、いつの間にか勉強することが楽しくなっていました。

そこから次第に韓国語の学習にのめり込んでいきました。自分の好きな歌を聴いたり、ドラマを見ながら聞き取れなかったりわからなかった単語があったら調べるということを繰り返したり、実際に歌ってみたり会話をしたりしているうちに、中学校に入学した時には読み書きはもちろん、韓国の番組を聞き取ることや日常会話ができるようになっていました。

もともと語学学習に興味があり、自分に向いているのではないかと考えていましたが、韓国語を習得したことをきっかけに、語学に関する職業に就きたいと思うようになりました。日本語・英語・韓国語はもちろんのこと、今後はより多くの国の言語を習得し、グローバルに活躍できる人物になりたいと考えています。

そのために、高校では語学学習とともに国際学習に力を入れた学校に入学し、各国の文化や興味をもった国の言語の学習に取り組もうと思っています。そして、大学では、高校で学んだことをより発展的に学習し、知識を蓄え自ら広い視点で考え、行動できる人になりたいと思います。最終的には五ヶ国語を話せるようになること、そして留学をすることが現在の目標です。その後は語学力を活かした通訳の仕事や、日本と世界をつなぐ外交官の仕事に就くなど、自分の好きな分野を活かし人と関わりながら、良い影響を与えられる人物になることが理想です。

ある日、私が英語の宿題をしながら母に、

「英語の勉強ってどうしてこんなに楽しいんだろう。みるみる知識が頭に入ってくる。」

と話したら、

「好きこそものの上手なれだよ。結はきっと英語が大好きだからそれだけ熱心に取り組めるんだよ。」

と言われはっとしました。何事も好きでないと続けることはできず、途中で諦めてしまうと思いますが、これだけ私が熱心に英語の勉強を続けられているのは自分が心から英語を好きだからなのだと気付きました。きっと、これから新たな言語を習得するうえでさまざまな壁や日本との相違点にぶつかると思いますが、好きという気持ちさえあれば乗り越えられると信じています。そして、結果として達成感を得られたり、自分のアドバンテージにつなげられたらとても嬉しいことでしょう。

仕事というのはお金を得るため、生きるためにするものではありますが、やりがいや仕事への意欲も重要なことだと感じます。こういった点で好きなことを仕事にできるというのはとても幸せなことだと考え、自分が将来楽しみながら仕事をできるように、学生である今から一生懸命に学業に取り組み、理想の進路の実現につなげていきたいと思います。そして、将来的に仕事をしながら社会に貢献することができればとても幸せだと思います。そして、年老いて人生を振り返った時に、最高の人生だったと言えるような人生を歩んでいきたいと思います。

私の先輩

大田区立大森第六中学校　三年
林　佳菜子

私の生きがいは〝追いかけること〟だと思います。色々な場面で自分よりも前を走っている人を見ると、その人を抜かすことを目標に頑張ることが多いです。ですが自分の生きがいを見つけたのは本当に最近のことで今年受験期に入ったということも大きいと思います。

今、私は勉強、特に〝数学〟を追いかけています。私の習っている塾は周りと比べてかなりのスパルタで、先生もすごく怖いです。一、二年の時は数学の授業が怖い先生で、難しい問題ばかりを解かされていたので、塾が本当に大嫌いでした。先生も怖いから質問ができない。だからわからない問題もそのままにしておくという悪循環ばかりをくり返していました。そんな私が数学に対しての考え方が変わったのは、一度塾のテストで良い点を獲れたからです。それから、問題の解き方を自分で考えたり、教えてもらった時に、すっと自分の中で納得したり理解する瞬間が増えました。また解いている途中に頭の中で答えまでの道すじを組み立てていくことがすごく好きになりました。今まで自分よりも格上だと思っていた人達と肩を並べられるようになり、解くことを楽しむようになりました。

また私には今でも追いかけ続けていることがあります。それは〝走ること〟です。私は中学校の部活で陸上部に所属しています。五月の大会で引退という形になりましたが、最後まで全力で打ち込んだ部活動生活でした。正直入部の動機は友達と一緒だから、ゆるそうだったからというもので、ここまで本気になるとは思っていませんでした。私にとって走ることが好きになったのは一人の人の存在があったからだと思います。その人は一つ上の部活の先輩です。先輩のことは卒業された今でも尊敬し続けています。長距離メンバーとして共に走ることが多く、その分自分との走りの〝差〟を感じることも多かったです。レースに出た時にみんなから〝彼女なら何かやってくれる〟〝彼女なら〟、という期待を抱かせてくれるような先輩は憧れの存在でもありました。先輩が私に走ることを楽しいと思わせてくれたのは、一年生の冬にあった陸上の駅伝大会です。四人のタスキリレーで私は第一走者、先輩は第四走者のアンカーで走りました。直前で走順変更したということもあり、緊張と寒さで震えながらのスタートを切りました。周りの選手が序盤からスピードを上げていき自分のペースが崩れかけましたが、レース前に先輩にかけてもらった「今日は楽しもう。」という言葉を胸にいつも通りで走ることを心がけました。そこからあまり覚えていませんが、途中からどこまでも走っていけるような感覚に包まれ、走ることの本当の楽しさを理解できたような気持ちになりました。私にとって走っていた時間は本当に一瞬でタスキリレー後に最初前にいた選手を抜かし、四位になっていたことに気づきました。その後第二走者、第三走者につながるにつれて、順位を落としてしまい、アンカーの先輩にタスキがわたった

時は八位でした。でも順位関係なく最後までタスキをつないでくれたチームのメンバーに感謝の言葉を伝えていた時、先輩が三位まで順位を上げて戻ってきました。圧倒的な速さで他校の選手をどんどん抜かしていく姿を見た時、やっぱりこの人には何をしても敵わない、と思いました。走る前に周りの状況を把握してかけてくれた言葉も背中で人を引っ張る姿も私にはない、カッコ良いところです。

数学も走ることも今の私にとっては〝追いかけること〟ですが、いつか自分のものにするくらい、もっと打ち込みたいと思います。苦しみや辛さを超えた先に本当の楽しみがある、そんなことを塾の先生が言っていましたが、それを自分でも証明するためにも、自分ができる最大限の努力を日々重ねていこうと思います。

一人のメリットとデメリット

大田区立六郷中学校　二年
木原心咲

私が家庭科の授業で学んだことは、一人で生きることの大変さです。私は一人暮らしをしたいと思っています。なぜなら自由になれる、自分のやりたいことがやりたい時にできると思ったからです。しかし、そう思いはじめた頃は一人暮らしのメリットだけを見ていて家事を一人でやらなくてはいけないというデメリットを全く考えていませんでした。しかし、中学校に入ってからデメリットのことも考えるようになりました。

そのきっかけの一つが二年生の定期テストです。たくさん勉強をしたのでテストでは満点に近い点数を取ることができました。いつもだったら「うれしいな」と思うだけでした。しかし、その時はいつもと違って「もったいないな」と思いました。なぜなら、一年生の頃からいい点数を取れていて、通知表の結果もいいのに学んだことを生かすことができていないなと思ったからです。中学校で家事のことをたくさん学ぶことができたのにテストが終わったら忘れるというのはとてももったいないなと感じ、努力をテストが終わったらしなくてもいいというのは間違いだと思いました。

もう一つは憧れの人がいるからです。その人は自分の理想にとても近い人です。その人の尊敬できるところは山ほどあります。そのうちの一つが料理ができることです。よくスイーツや自分の朝ご飯、昼ご飯を作っています。しかもその人は中学三年生で自分と同じ中学生がちゃんとした料理を作っていることにとてもびっくりしました。その人はユーチューブをやっていて受験生でもあります。そしてとても頭がよくて朝起きたら勉強、学校から帰ってきたら勉強、寝る前にも勉強とそういうところを見て自分との差を感じます。勉強も料理も努力をしたからできるようになったんだなと思いました。しかも、その人の作る料理は栄養バランスが考えられて

いて、色鮮やかでおいしそうなので自分が「作ってみたいな」と思う料理ばかりです。

この二つの出来事があり、私は家事に少し興味をもちはじめました。そして自分が今できることを少しずつ行動に移せたらいいなと思います。そう思えるのは中学生になった時に二つの目標を立てたからです。一つめはできないこと、やったことのないことに積極的に挑戦することです。少し怖かった柔道、初めてで不安だったダンス、苦手な水泳など今までたくさん挑戦できました。二つめは負けない、逃げない、諦めないです。小学校はこの目標とは全く逆でそんな自分を変えたいと思いました。今、自分ができることは何か考えてできそうだなと思ったことが二つあります。一つめは洗濯です。二年生のテスト勉強で洗濯記号を覚えたのでそれを生かしたいです。まだ洗剤、漂白剤の使い方がよく分からないので自分で調べたり母に教えてもらったりしながらやってみたいと思います。また、洗濯物を洗うだけでなく干すところまでやりたいです。二つめは料理です。私は夏休みに自分が食べたいと思った料理を作りました。母にできないことを手伝ってもらいながら作ってみたらおいしくできました。楽しかったです。料理の方が洗濯よりもできると思うし、やった回数も料理の方が多いので色んな料理にどんどんチャレンジしていきたいです。

私が家庭科の授業で学んだことは、一人で生きることの大変さです。人は一人で生きることができません。誰かが支えてくれているから生きることができます。でも、一人でできないことがないということはありません。できることは自分でやって助けが必要なときに支えてもらう、無理をしない、頼りすぎないことが大切だと思いました。

将来の夢

大田区立六郷中学校　二年
矢野愛歩

まず初めに私の将来の夢について話そうと思う。私にはまだ、この職業に就きたいというはっきりとした思いはない。ただ、これに関係する仕事がしてみたいというものが二つある。一つめが音楽に関係する仕事。二つめが動物に関係する仕事だ。これからこの二つについて詳しく話していこうと思う。

まず音楽に関する仕事についてだ。こんな仕事をしてみたいと思った時、最初に浮かんだ理由はシンプルに音楽が好きだからだ。小さな頃から歌を聴くのも、歌うのも好きだし楽器を演奏するのも大好きだ。しかし歌手になりたいとか、プロの演奏家になりたいと思ったことはなかった。いや、なってみたいという気持ちはあったのかもしれない。今もあるのかもしれない。ただ、なれると思っていないから、なろうとは思わない。それでも音楽に関する仕事がしてみたいと思っているのは事実。それは多分すごく音楽が好きだから大人になって死ぬまでただ聴くだけっていう立場なのが何か物足りなくて、嫌だからだと思う。音楽関係で食ってますって言え

るくらい音楽の近くにいたいと思う。でも、そのために就く職業がプロの歌手やプロの演奏家みたいな音楽を作り出すものじゃなくていいと思っている。将来音楽関係の仕事に就くなら楽器屋さんで働いたりして暮らしたいと思う。それだけでも私は少しだけ音楽に近い所で生きていると思えるからだ。

次に動物に関係する仕事についてだ。このような仕事に興味をもった一番の理由もやはり好きだから。動物が好きだからだ。この気持ちが一番大きい。家には魚やカメ、鳥がいるが、事情があって犬や猫は飼えない。大きな動物を世話したこともないし、そばにある大切な命を失う悲しみも私はまだよく知らない。もちろん苦しいのも辛いもの分かっている。でもそれを体験したことがない私にはいくら頑張っても本当にその気持ちを知るすべがない。私はまだ本当の命の重さを知らないと思うし、命と触れ合う仕事とはどういうものかも分からない。でもそれを知りたいと思う。心から思う。そう思っているから動物に関係する仕事に就いてみたいと思うのだ。しかしたくさん勉強して資格を取って獣医師になるとかそんなことは考えたことはなかった。ただ、動物園で働いたり、それこそお金にならなくてもいいから保護団体で活動したりして、命を身近に感じることができればいいとも思っている。

以上が音楽関係の仕事や動物関係の仕事に対する思いだ。正直この二つの仕事をしてみたいと思う理由があまり深くないのは分かっている。どちらも自分にとって興味があるもので、大好きなものだから大人になったらもっと身近にしたいと思っている。簡単に言えば、大好きなもののそばにいるためにそれに関係する仕事に就きたいということだ。好きなものをより身近にするにはそれが一番手っ取り早いのだ。これが本音だ。私にはこれらの仕事に対する強い志があるわけではない。しかし音楽も動物も私にとって大切で大好きなものだ。その気持ちは何よりも強い。ただ、それだけの理由でこのどちらかの仕事を目指し、進路を決めるのは不安なのだ。好きという気持ちだけでこの先にあるたくさんの苦労を乗り越えていけるのか。それは誰にも分からない。決めるのは全部私だからだ。この先何があっても諦めるか、諦めないか決めるのは自分だからだ。ただ、将来に対し不安があるのは確かだ。音楽に関する仕事についても動物に関する仕事についても私には何も分からない。どちらかを選ぶ判断もまだできないし、どちらでもない方向へ進むかもしれない。分からないから無限に広がる。そんな未来に対しての不安と期待が入り混じる。でも、可能性が無限に広がるならたくさんの選択肢から選びたいと思うのだ。こんな気持ちから私は総合学科の高校を希望している。そこで、視野を広げて、選択肢を増やしたいと思うのだ。まだまだこれからだ。だから今はまだ将来の夢はない。いや、無限に広がる夢があるのだ。

縁の下の力持ち

北区立赤羽岩淵中学校　三年
石原　佳菜子

あなたは、東京オリンピックに関わっている人の数を想像したことがあるだろうか。選手だけでも一万人以上いるこの大会は、実に九万人以上の人が関わることで成り立っている。しかし、私達が活躍や軌跡を目にすることができるのは選手ばかりで、選手以上にいる大会関係者やボランティアのことはよく知らないという人達が多いだろう。彼ら、彼女らはオリンピックの表舞台に立つことはないもののオリンピックという重要な祭典を成り立たせるため、盛り上げるために大きな貢献を果たしている。そう、いわば影の金メダリストなのである。

その一人がメダルをデザインした川西純一さんだ。私が川西さんを知ったのは陸上の表彰式を見ていたときに選手の首からかかるメダルが印象に残り、その後インターネットで調べたことがきっかけである。「東京二〇二〇入賞メダルデザインコンペティション」で公募を行った結果四二一人の中から見事選ばれたのだ。今回のメダルの特徴は大きく二つある。一つめはメダルが小型電子機器からリサイクルされてできているということ。二つめは手で触れるだけで順位が分かるように裏に凸加工をいれていることだ。視覚障害のある方たちに配慮されたデザインになっている。パッと見ただけでは分からない、けれどそんな些細なところまでこだわる川西さんの仕事への情熱を私は感じた。決してスポットライトの当たる場所にいるわけではない、けれどオリンピックに懸ける思いは選手などと同じだと思う。そんな影の立役者がいるから選手達も輝くことができるのだ。私も川西さんのようにスポーツに貢献したいと思った。

私の将来の夢はホッケー女子日本代表のさくらジャパンの選手になり、オリンピックの舞台に立つことだ。私がホッケーを始めた理由は五年前のリオデジャネイロオリンピックを見て選手のかっこよさ、ホッケーというスポーツの面白さに惹かれたからだ。私があのとき抱いた感情を自分が選手になったときに感じてもらえるそんな存在に私もなりたいと思った。ホッケーの選手となりホッケー界を盛り上げていきたいと強く思っている。けれど、選手になることができる人はほんの僅かしかいない。しかし、川西さんのような方がいることを知り、選手以外の仕事でスポーツに、ホッケーに貢献するということも頭に入ってくるようになった。その一つが、グラウンドキーパーという仕事だ。この仕事は芝生のコンディションを整えるそんな仕事だ。芝生の状態でボールの弾み方がかわる。選手が自分のコンディションを整えるように、グラウンドキーパーもピッチの状態を整える。試合に込める思いや熱量は選手となんら変わりない。選手たちはグラウンドキーパーがいるから試合ができる。逆に言えば、いなければできないのだ。

このような影の立役者がいるのはスポーツ業界に限ったことではない。身の回りのことで言えば家事をする私達の両親

だ。なんで家事を両親がするのか聞かれたら私は答えることができない。それに、両親がやっていることに疑問をもつこともなかった。けれど、洗濯や食器洗い、掃除などをしているからこそ私達の生活が成り立っている。家事も仕事の一つなのだ。仕事というと私はお金をもらうものだと考えてしまう。家事をしてもお金がもらえるわけではない。そう考えると家事はオリンピックを陰ながら支えている川西さんなどと同じ、影の立役者なのかもしれない。

オリンピックに携わる人の仕事は大きく二種類に分けられる。表舞台に立つ人と裏方の人だ。どちらがかけてもオリンピックは成功しない。これは、オリンピックに限った話ではない。私達を取り巻いている社会全体でも言える話だ。もし、私がホッケーの選手に将来なれたとしたら支えてくれている方たちに最大限の感謝をしたい。選手になれず陰で応援する立場になったならば、自分の仕事に誇りをもちたい。その仕事に誇りをもてたとき私は本当の縁の下の力持ちになれることだろう。

技術部での経験を通して得たもの

北区立赤羽岩淵中学校　三年
中山　真里

私は、小さい頃から、パズルやブロックや電車のおもちゃの線路など、何かをつなげてみたり、自分なりに工夫して組み立てたりすることが好きでした。そんな私は、中学校に入学して「技術部」に入部しました。

技術部では、何人かでグループを組み、一年がかりでコンテストや、学校内の文化発表会に向けて作品を作ります。

まず一年生の時は、四角い箱を運ぶことのできるアーム型の有線のロボットを作りました。コンテストでは、このロボットを使って中央にあるゴールに四角い箱を何個引っ掛けることができるかを、相手チームと対戦して競います。私は、こんな風に自分で動かすことのできるロボットを作ったことが初めてだったので、とにかく作れることが嬉しくて、楽しくて夢中になりました。

そして二年生では、プログラミングに挑戦し、無線で動く車を作ることになりました。しかも、ただ前に走るだけではなく、障害物に衝突した時は自動的に止まったり、後進するときには後ろのライトが点滅したり、さらに暗いところに来るとライトが強く光ったりするなど、細かいところにまでこだわってプログラミングすることにしました。細部にこだわった分、失敗することも多く、そのたびに立ち止まって、

センサーや電気回路を確認する作業を必要としました。たくさん試行錯誤して、ついに完成し、最終的に満足のいくものに出来上がった時には、とても嬉しかったです。また、その作品が、区のコンテストで賞をもらえたことを知った時は、さらに頑張った甲斐があったと思えました。

そして三年生になって、技術部としては最後の一年になりました。今年は、また一年生の時に作ったものと同じ目的のロボットを作っています。今まで得た知識や技術を使いながら、モーターの使い方やギア選びなどを工夫し、いかに動作の安定性を得られるか、かつ効率の良い動作を行えるかなど、一年生の時に作ったものよりも少し高度なものを目指して作製しています。

私は、この三年間の「ものづくり」を通じてたくさんのことを学びました。

一つめは、「ものをつくる」ということはすべてが組み上がり、完成して形になった時はもちろん嬉しいのですが、それにも増してうまくいかない理由を探ったり、どうすれば理想の形に近づくのか悩んだり、工夫した結果、自分の望んだ通りの動きをしてくれたりするという嬉しい経験を積み重ねるという作業もまた、楽しいのだということを知りました。

特に技術部での製作は、仲間と一緒に協力しながら一つのものを作り上げていくので、自分一人で作製した時以上の力を発揮することができることもあります。もちろん、時には意見が合わなかったりすることもありましたが、同時に、自分では気付くことのできなかった視点に気付くことができ、結果的に、自分の能力を向上させることにもつながったり、さらにより理想に近いものを完成させることができたので、予想以上の満足感と達成感を得ることができました。

二つめは、目標とするものが大きければ大きいほど、それを構成する土台や、パーツの一つ一つといった基本的なことは、特に手を抜かずに正確に作業することが大事であるということです。

ロボットを作製していく間には、何回も難しくて面倒なところ、手間がかかるところに出くわします。正直、面倒くさくて、ある程度のところで妥協してしまうこともありました。しかし、後で不具合が起きる時は、だいたいその箇所が原因であることが多いのです。つまり、その時には完成までの近道に感じたことでも、結果的には遠回りになっていることが多かったのです。その経験から、基本の大切さを学びました。

将来、私はどんな職業に就くのか、まだ決めてはいません。しかし、この中学三年間で得た「完成までの試行錯誤する楽しさ」や「基本を大切にすることが大切である」という経験は、この先、どんな場面にも通じる大事なことだったと思います。

卒業まであと半年ですが、この技術部を離れた後も、完成図を思い描きながら、一つめのパーツを手にした時の、あのわくわくした気持ちをいつまでも忘れることなく、「ものづくり」は続けていきたいと思います。

父への贈り物

北区立赤羽岩淵中学校　三年
三浦駿弥

僕の父が、突然秋田県に転勤することになってしまいました。僕が生まれてから幼稚園を卒園するまでの間も、父とは別々に暮らしていたので、これが二度目の離れ離れなのですが、その頃の僕は幼かったので、父と一緒に暮らしていないことに違和感をもったこともなかったし、週末に会いに来てくれる父に対しても、特に疑問をもったりすることもありませんでした。

小学校に入るときから、父と一緒に暮らせるようになったので、低学年の頃はまだ少しぎこちない関係で、どちらかというと、母と祖母と三人で生活していたときの方が楽しかったなと思うこともありました。テレビのドラマやアニメに出るような、キャッチボールを一緒にしてくれるお父さんや、公園で一緒に遊んでくれるお父さんに憧れもありましたが、僕の父はそういうタイプではなく、母とはすごく仲良くしているけど、僕には特に関心がないように感じました。

中学校に入り、僕はバスケットボール部に入りました。それまでも六年間スイミングを続けていましたが、父は見学に来てくれることもなかったので、バスケの試合を見に来てくれるようになったときは、緊張したし恥ずかしかったし、少し嬉しかったです。父は学生時代にラグビーをやっていて、全国大会にも出場したスポーツマンだったので、僕が運動部に入って頑張っているのを喜んでいるのだと、母からよく話をされました。確かに、部活のことになると、値段の高いバスケットシューズやリュックなども平気な顔で、一緒に買い物にでかけて買ってくれたり、僕が体をいためた時も、薬屋で塗り薬を買ってきてくれたりと、僕に対して、優しく気遣ってくれることが増えてきたことを実感しました。何気ない会話も前よりは増えた気もするし、僕が肩たたきをしてあげることも多くなったと思います。最近は僕の高校受験について話すことも増えたし、僕のいないところでも、パソコンで高校のことを調べてくれたりしているようでした。

そんな中、突然、「三週間後に、秋田に行くことになったからな。」と、父から告げられました。母も驚いた後に大泣きしていました。父は単身赴任で秋田県に行くことになり、八年ぶりに家族が離れ離れになることになりました。後で母から、本当は家族全員で一緒にいたいけど、僕の進学や将来のことを考えて単身で、遠い秋田県に行くことを決めたと聞かされました。母は毎日忙しく、父の引っ越しの準備をしていました。一日に何度も買い物に行く日もありました。ある時、母が珍しく朝からミシンを出して、何か作りはじめました。椅子にかけることができる箱ティッシュケースを作ったと、満足そうに僕に見せてきました。母の好きなうさぎの柄の布で作ってあり、僕は、父はおじさんなのに、こんな変な柄で作る必要ないのになと思いました。でも母は嬉しそうに、「パパが寂しくないように。」と言って、秋田に持って行く荷物にも可愛い柄のシールを貼り付けたりしていました。母が

タオルを切り、雑巾を作り始めたとき、ふと、僕も父に何かしらしてみたいと思いました。ミシンをかける母の姿を見ていた僕に気づいた母が、「やってみる？」と声をかけてきました。何故か恥ずかしい気もしたけど、一枚縫ってみることにしました。ミシンなんて普段使わないから出来はよくないかと思うけど、いろいろなことを考えながら作りました。その夜に、母はニコニコして、父に僕が作った雑巾を見せました。父は「そうか。」と言っただけでした。でも母は嬉しそうにしていました。翌日父のいないときに、「パパ、雑巾喜んでいたね。」と母が言いました。僕には特にそうは見えなかったけど、母はそう言いました。

何日かして、父と母が引っ越しの準備をしているのを見たときに、父が僕が作った雑巾を触っていました。たまたま荷物をいじっているときに触っていただけかもしれないけど、僕はその父の姿を見て、なんだか胸が熱くなりました。お互いおしゃべりな方ではないし、家の中でも別々の部屋で過ごすことが多いけれど、なんとなく父との繋がりを感じました。

僕が父のために作ってあげられるものなんて、雑巾くらいしかまだないけど、誰かのために自分で何かを作ること、それを受け取った人との繋がりなどを感じることを、僕は初めて経験したような気がしました。上手く言えないけど、雑巾を作ってみて良かったと思いました。

人のつながりから夢へ

北区立桐ケ丘中学校　二年
片寄　優菜

「学校の先生」が私は大好きだ。先生には色々な人がいる。そんな色々な先生と話す休み時間は最高に楽しい。そんな楽しい時間が得られるのは先生がいるから。だから私は先生が大好きだ。とても印象深いのが、学校を用事で二週間ぐらい休んでしまった時のことだ。その間に授業がすごく進んでしまっていた。その時すごく焦り、不安だったが、先生が声をかけてくれた。授業後や休み時間に丁寧に教えてくれた。とても嬉しく、もっと頑張ろうと思った。だから私も人の気持ちに寄りそい、思いやりをもって接することができる人になりたいと思った。

私は人と関わるのが好きで得意だ。どんな人にもその人にしかない個性があり、その個性はとても興味深い。なぜなら、それを知って新しい発見ができると思うとわくわくするからだ。今思えば、私も最初からコミュニケーション能力があったわけではなく、寧ろ大人しい方だったと思う。しかも人と関わるのがめんどくさいとまで思っていた。それでも人と関わってみたいと思ったのにはきっかけがあった。

それは懐かしき六年前、私が小学二年生だった頃。私はその時担当だった音楽の先生とすごく仲が良かった。その先生はすごく優しいが時には怒ったり、おもしろいことをしてく

れたりと感性豊かなフレンドリーな先生だった。当時の私は大人しく、人と関わるのがあまり得意ではなかった。だから、音楽の先生は、私の憧れの人だ。私は一度だけなぜ音楽の先生になったのか聞いたことがあった。

そしたら、

「先生は元々あなたに似て静かな子だったけれど、先生はそんな自分が嫌いで変えたかった。そんな思いから少し時間はかかったけれど色々な人と話せるようになった。それでも好きな音楽を通し、もっと色々な人と関わりたいと思って、教師を選んだんだ。」

と教えてくれた。この時の話は今でもすごくよく覚えている。それを聞いた時は、だから先生はこんなにも温かくすごい人なのだなと感じた。そして私も、こんな人になりたいと思うと同時に教師にもなってみたいと思った。だからまず教師になるためにも、コミュニケーション能力を高めるためにも、沢山の人と関わってみることにした。私は今、ダンスを習っている。昔は、アクロバット、バドミントン、水泳、体操やソロバンなど習っていた。そこでは様々なタイプの人がいた。もちろんその中には苦手な人もいて、最初はどう接したらよいのかが分からなかった。それで私はまず、笑顔で話すというのを大切にした、上手く話すことができなくてもとりあえず、笑顔でいる。それだけでも少し変わったような気がした。次に心がけたのがよく周りをみるということ。話せなくても、よく周りを見ているだけで色々な気づきや、自分の成長につなげられると思ったからだ。それで得られたことは、一人一人の人間観察をすることが大切で見ているだけでもその人がどういう人で何が好きなのか分かることがあること。コミュニケーション能力が高い人は、自分から話しかけている人が多く、会話を近くで聞くと話しが終わっても、また話題を変えて次から次へと話しているのが聞こえたこと。この二つを実際にやってみると、人と接することの思いが緊張や不安から楽しさに変わることが分かった。周りとの距離感が少しずつ縮まっていくことも感じられたし、自分から、歩みよる大切さも学べた。そして今では苦手なタイプの人とも自然に話せるようになったと思う。常に心がけていることは、相手のタイプによって聞き方や話し方を変えることだ。最初の頃より、少しは成長できたと実感している。更に、同級生だけでなく先輩や後輩とも関わってみたいと思い、生徒会役員に立候補した。すごい不安で押しつぶされそうだったが、友達が応援してくれて頑張ったら、当選でき、今では学校に貢献している。今の私は、人間関係がすごく充実している。そして、時間はかかったが、今では初対面の人とも話せるようになり、色々な人と話せば話すほどおもしろく、人と関わることの大切さも日々学んでいると思う。

私は前述したとおり憧れた音楽の先生の影響で教師になるのが夢だ。なので、教師になるにはどのようなことが必要なのか調べた。小学校の先生で調べてみた。そうすると、必要なことが四つあった。①対人スキル②教師の教養や専門性について③子供についての理解④良識ある一市民としての教師のあり方、以上が必要なことだ。思っていたより、はるかに難しそうだったが、やりがいがあるとも思った。常に意識して、できることから修得していきたいと思う。

この夏休み中、オリンピック選手のインタビューを沢山聞いた。そこで感じたことは、結果に関係なく、誰もが前向きな発言をしていたことだ。すごくかっこいいと思った。決して言い訳をせず、感謝の気持ちを忘れない。その姿勢に感動した。私も見習いたい。

最後に残された学生生活の八年間を有意義に過ごすため、次のことを心がけたいと思う。今、想う夢に向かって走り続けたい。今まで出会った先生方を見習い、これから関わっていくだろう全ての人に対して、時には本気で接し、切磋琢磨しながら成長し続けていきたい。夢は願うものではなく叶えるものだと思う。今この気持ちを忘れずに、過ごしていけたらいいと思う。オリンピック選手のように、高い目標と、強い信念をもち続けることは簡単ではない。だからこそ、生き方、考え方の目標にしたい。そして、いつか私らしく私らしい先生になれるように、精進していきたいと思う。

学ぶ、そして成長

足立区立千寿桜堤中学校　二年
内田　祐椛

私たちは、未来を照らすプロジェクト、ミラテラという活動をしました。具体的には、商店街の活性化をテーマに、班で防犯対策を副題として、中学生の自分たちに何ができるかを、大学生のファシリテーターの方と一緒に考えながら活動していきました。班で意見を出し合いながら、未来がより良くなるにはどうすれば良いかというのを考えるのは、とても難しかったですが、自分たちの出した具体案が形になっていくのはとてもやりがいがあり、協力して進めることができて良かったです。

そんなミラテラから、私は大きく分けて三つのことを学びました。

まず一つめ。仕事をするにあたって、段取りはとても大切だということです。私たちの班は、防犯対策のためにポスターを作る案を提案し、完成したものを商店街に貼ってもらおうと考えました。ただ、何をしたいかは決めたものの、ポスターをいつ、どこに貼るのか、貼る許可は誰にとればいいのかなどを考えておらず、段取りの悪さもあってか、ポスター作りがなかなか進みませんでした。このことから私は、仕事をする時は、予定を順序立てて行うことが、スムーズにやりたいことができるのだと学びました。

二つめは、もっと周りを見るということです。私たちは、防犯カメラが回っているというのを知らせる内容のポスターを作りました。それを、商店街内の、防犯カメラがある所の近くに貼ろうという提案が出たので、班で商店街を調査しに行きました。見に行ってみたところ、三十二個もあることがわかりました。いつも登下校で通っている道だったのに、三十二個中、一個もあるというのを知らなかったので、とてもおどろきました。私はもっと色んなことに目を向けて生活しなければならないなと感じたし、調べることの大切さもこれを通してあらためて知ることができました。

最後三つめは、班長の大切さです。私は今回、クラスに六

人の班長の一人として選ばれました。しかし私は、ファシリテーターの方との初めての話し合いの日、大事なパスワードが書かれた紙を忘れてきてしまったり、司会をファシリテーターの方に任せてしまったりと、迷惑ばかりかけてしまい、とても班を引っ張れるとはいえませんでした。ここであらためて、名前だけの班長ではだめだなと思いました。

また、私はミラテラで自分から動くという点で成長できたと思います。言われてから動く、言われてないから動かなくてもいい、そういう意識が薄まったからです。夏休み前、ポスターを貼る許可をまだ取れていませんでした。先生にも特に何も言われていなかったので、いいかなと最初は思っていましたが、でも、一回質問してみた方がいいよな、と意識が変わりました。そこから、夏休み中にも先生や班のメンバー、ファシリテーターの方などと活動をし、作業をとても進ませることができました。

まとめると、今回私が学んだこととして、先を見通して動くこと、もっと周りを見ること、もっと責任感を、特に班長は強くもつこと。この三つが大切だということです。新型コロナウイルスの影響で職場体験はできなかったけど、それでもミラテラというプロジェクトでこんなにもたくさんのことを学べたし、自分から行動するというところで成長も少しできたと思うので、とてもいい経験をさせてもらったなと思いました。この学んだこと、成長できたところを無駄にしないように、毎日の生活から意識していきたいと思います。また、もっとたくさんのことを学び、成長するために、失敗をおそれずに、色んなことに積極的にチャレンジしていきたいなと思います。

夏休み明けには、学年の皆へ活動報告もあるので、そこで、班長としての成果を発揮できたらいいなと思います。

書道

調布市立第八中学校　一年
増田りん

私の将来の夢は、書道家になることです。

私がまだ生まれる前、字が汚いことに後悔をした私の父と母が字がきれいな人になってほしいと、私に書道をはじめさせました。このことを後から聞いた私は、すごくうれしかったです。はじめたころから、今までずっと楽しく書いています。うまく書けなくて、くやしくて、泣きながら書いたこともあるけど最後は、上手に書けて、うれしいし、達成感を味わいます。自分のそのときの気持ちや筆づかいが、そのまま表現され、人それぞれちがう字。書道って素敵って思いました。賞をいくつももらったことも、小学一年生のときからずっと、続けてこられた理由の一つだと思います。自信もどんどんついていきました。

私の書道の先生は、もちろん字はすごくきれいです。その上、私に、礼儀や、言葉、漢字など、たくさんの新しいことを教えて、くれます。たくさんのことを知っている、先生のお話は、すごく聞くのが楽しいです。学校の先生よりも、長

い間、そして今もお世話になっている、大切な先生です。書道も、たくさんの書き方を知っていて、先生として、書道家として、絵も描けてしまう所を、すごく尊敬していて、こうなりたいと思う姿です。

学校でも、行事のポスターなどの、字を書く場面では、仕事をまかせてもらったりしてうれしかったです。自分のとくいなことを、生かせるのは、素敵だなと感じました。

自分にとって、なくてはならないもの。それが、私の場合、父と母が初めてさせてくれた、書道です。書道に、出会わせてくれた、父と母には、今でもすごく、感謝しています。私の字が、どんどんきれいになって、賞をもらったり、作品を見せると、ほめてくれて、喜んでくれます。父と母に、よろこんでほしい、というのも、私の書道のやりがいにもなっていきました。

今のように、パソコンやスマホでなんでもできてしまう、デジタルな世の中でも、字を書かなくてはならないときが、必ずあると思います。去年、書道の作品の展示会に行ったときに、書道を仕事にしている人が、私に、話をしてくださいました。その方は、学校で字を教えたり、自分で書いた字をパソコンで読みこんで、野菜の袋の字に使ったりする仕事をしているそうで、私はそのとき、はじめて、自分の字を、パソコンで読みこんで、使ってもらう（売る）という仕事を知りました。今みたいな世の中だと字を書くことも減ってしまうから、こんなことも、できるんだよとくわしく教えてくれました。私も、書道家って、むずかしいんだろうなと思っていたので、もちろん、興味があって、やってみたいと思いました。そのときから、スーパーで野菜の袋の字を観察したり、袋をとっておいてもらって、字の練習につかったりもしています。この方のお話を聞いて、今のような、パソコンや、スマホでなんでもできてしまう世の中でも、新しいやり方で、字を見てもらったり、使ってもらったりすることはできることを、知りました。私にとって、書道という世界が前より広く、楽しく見えた、きっかけになりました。

書道に、興味があって、ならっている人も書道家や、字を書く仕事に就きたいと考える人は、多くないと、思います。でも、だからこそ、字をひろめたいと強く思えるし、気持ちをこめて書いた字は、デジタルの字よりずっと、あたたかくて、人を、感動させてくれることを、少しでも、多くの人に知ってほしいと思います。そして、将来、もっともっときれいになった字を、父と母に、見せたいです。

私の将来の夢は、私の字が、少しでも多くの人を感動させ、書道へ導き、書道の良さを知ってもらえるような、そして、父と母をよろこばせることのできる、書道家になること。

今の私のままでは、まだまだ、道は長いです。だからこれからは、自分自身が、感動した字について、くわしく知って、まずは、自分が感動できる字を、書けるようになることを、目標に、頑張ります。

私は、書道が大好きです。

食生活と日本の未来

町田市立真光寺中学校　二年
井上　美青

私は、趣味と言うほどではないけれど、今までに何かと野菜などを育てる機会が多くあった。例えば、父親と借りた小さな畑で、季節の野菜を育てたり、自分の入っている部活で、学校の花壇にきゅうりやししとうを植えて育てたりもした。そこでとれた野菜は全てが上手く育ったわけではなく、時には野生の動物に食べられたり、時には病気や害虫、かびなどの被害に遭うこともあった。台風や日当たりの悪さなど、天候による影響も大きかった。そんな中、とれた野菜は長期休業の間に出ていた家庭科の調理の課題に用い、家族みんなで食べることができた。そして、自分で育てて、調理に至るまでの過程を経験し、私は〝食〟というひとつの産業について興味をもつようになった。こんなにも環境に左右されやすい食べ物。では、日本や世界の食料事情はどうなっているのだろうか。

そこで見つけたのが、家庭科の教科書に載っていた、『日本の食料自給率』という話だ。それによると、日本は世界で最大の食料輸入国と言われており、日本の食料自給率は年々低下し今や主要先進国の中でも最低の水準なのだそうだ。食料自給率を国際的に比較してみると、カナダが二百五十八パーセント、オーストラリアが二百五パーセント、アメリカ合衆国が百二十七パーセント、イギリスが七十二パーセントとなっている。その中で、日本は三十九パーセントとかなり低い水準を示している。その内訳を品目別にしたグラフを見てみた。そこでは、主食用の米が百パーセント、野菜が七十九パーセント、食用の魚介類が六十パーセントと、何品目かは低すぎない数値だった。しかし、砂糖類は二十九パーセント、小麦が十二パーセント、豆類に至っては九パーセントと、一桁を示していたのだ。また、国内の食料自給率に基づいて、「朝食を日本で生産されるものだけでつくった場合」という図が載っていた。和食の場合、魚（かれい）が五十五パーセント、米は百パーセント、みそは二十一パーセントなどだったが、洋食ではパンが十七パーセント、卵が十一パーセント、ウインナーソーセージが五パーセントなど、とても朝食がつくれるとは思えない数値が並んでいた。

日本は面積が狭いとはいえ、同じくらいの面積のイギリスでさえ食料自給率が七割を超えている。南北に長く、山や海の影響もあり地方により気候が異なる日本ならば、地域によって様々な食物が生産されているのではないかと思われる。では、地域によって異なる気候などをいかした食物の生産をより多く豊かにし、日本の食料自給率を高めるために、私達、特に若い人達は何ができるだろう。

まず第一に、値段だけで買う品物を決めるのは、食料自給率にあまり良い影響を与えないと考える。値段の高い安いでいえば、輸入品の方が安いことがほとんどだろう。しかし、安い方ばかり買うのでは、国産の品物が売れずに生産量も落

ち込んでいくだけなのではないだろうか。なるべく国産の品を選び食べることが、一番簡単で実行しやすい、食料自給率アップへの第一歩だと考える。

そして第二に、日本の農業や漁業などに若い人達が目を向け、働き手としての関心をもってみることが大切だと思う。近年、第一次産業において、若い担い手が減っているというニュースをよく耳にする。地域の農業などの魅力を知り、これからの日本の産業を担う者として興味・関心をもつことで、第一次産業の従事者の減少を抑えることができる。そうすれば生産量が減ることなく、輸入に頼る量も減らすことができると考える。

この他にも、私達ができることはたくさんあると思う。しかし、一番大事なのは、みんなが食料事情について理解し、興味をもち、他人事として捉えず、一人ひとりできることを考え行動することなのではないだろうか。何事も、正しい知識を得ることからでないと始まらない。だから、食料事情について知り、考え、行動することがやはり大切なのだ。

食料自給率が低い、つまり輸入に頼っていると、輸入先の国で干ばつや異常気象などが起こった場合、作物の生産量が低下し国際価格が高騰し輸入しづらくなることがあるそうだ。そうなったとき、被害を最小限にとどめるには国内の食料自給率が高いほうがよい。今よりも自給率を高めるために私達ができることは色々ある。私は自分の経験からこのように〝食〟に興味をもって、たくさんのことを学び、私も親と買い物をするときに国産のものを選んだり、将来を考えるとき、農業などへの従事も視野に入れて考えたりしようと思うようになった。みなさんも〝食〟について知り、自分の考えをもち、これからの日本のために行動してみるのはどうだろう。

肉じゃが作り

町田市立真光寺中学校　三年
澤　野　由梨佳

私は以前に父方の祖母と一緒に肉じゃがを作ったことがある。私の家では肉じゃがは和食の定番で、祖母の作った肉じゃがはまさに絶品で私にとって肉じゃがは大好きなおかずだった。その美味しさを自分でも作ってみたいと思ったのが、きっかけだった。正直、肉じゃがなんて、具材や手順、調味料があっていれば誰でも同じものが作れると思っていた。いざ祖母に教わりながら作ると、何かが違っていた。似ているようで似ていない。同じ具材、手順なのに全く違う味だった。自分の舌を疑うような違いから、祖母がなにか教え忘れたのではなんて考えたりもした。だから、祖母が肉じゃがを作る時はまじまじと見た。ビデオカメラで撮ったりもした。でも、やはり具材も、手順も全く一緒だった。他のお料理にも挑戦してみた。もしかしたら、肉じゃがは私のような初心者には難しいのかもしれないと思ったからだ。だから何度も何度もたくさんのお料理を作ってみた。でも、結果は同じだった。どの料理を作っても祖母の味と一緒にすることが出来なかった。けれど、父や母、兄は私が作った料理もどれも美味しいと言ってくれた。嬉しかった。けれど、私の中で少しモヤモヤッと

した感情が湧いた。私は祖母に、なぜ同じ味にならないか聞いた。祖母は、

「お料理はね、もちろん完成した時の見た目や味も大切だけどね、その完成までの過程がとっても大切なのよ。心を込めて丁寧に丁寧に作れば、それを食べてくれる人もきっとわかってくれるからね。でも、ムッとした難しい顔ではダメよ。鼻歌を歌ってしまうぐらいニコッて楽しみながら作らないとね。そしたらきっとお料理も自然とおいしくなるはずよ。それに、一つの味にこだわらなくてもいいの。おばあちゃんの作ったお料理が絶対に正しいなんてことないんだから。自分の個性を出さないとね！最初からお料理を完璧に作れる人はなかなかいないのよ。だからこれからもお料理頑張りましょ。」

と言ってくれた。すごくすごく嬉しかった。もしかしたら祖母の言葉は私が一番欲しかった言葉だったのかもしれない。今まで私が、味だけにこだわっていたこと。過程よりも完成した時の見た目や味を重視していたこと。お料理をとても難しく考えていたこと。祖母の作ったお料理をとにかく真似して、全く一緒にしようとしていたこと。私の中のモヤモヤッとした感情は嵐のように飛んで行った。だから、私はその日から、祖母の味に強いこだわりをもつのをやめた。どのお料理も作り方の手順や材料だけ教わって調味料やトッピングなどの工夫に繋がるものは自分で考えて作るようになった。だから、自分が一生懸命考えて作ったオリジナルのお料理を「美味しい」と言って食べてもらう時の嬉しさは計り知れないものとなった。

「美味しい」の一言で私はもっと多くのお料理に挑戦したり、過程を工夫して美味しさをもっと伝わるようにしようと努力するようになった。お料理を作ることは難しい、大変そうと思われがちだけれど、少し見る角度を変えてみればお料理を作ることの楽しさだったり美味しいと言われた時の嬉しさを味わうこともできる。そんな楽しさをさらに味わうため私はこれからもお料理作りを頑張りたいと思った。

また私は今もなお、肉じゃが作りに苦戦している。肉じゃがを毎回美味しく作るのはとても難しい。好き嫌いがとても分かれるおかずだから、食べてもらう人のことも考えて、その人にあった味付けをその場その場で調節しなければならない。でも、その分美味しくできた時は嬉しいし、作ることのやりがいを感じることもできる。肉じゃがは確かに作るのにとても苦戦するおかずだけれども、やはり私は肉じゃがが大好きだ。

高等学校の部　最優秀賞

実習を終えて

愛国高等学校　三年
齊藤　絵舞

私は衛生看護科に在籍し、看護学生として資格取得に向けて日々勉学に励んでいます。私が看護師になりたいと思い始めたのは、小学生の頃です。テレビやドラマ、実際に病院で目にした看護師の姿にとても魅力を感じました。

小学生の高学年になった頃、祖母は認知症が進行し数分前の出来事も忘れてしまうようになりました。同じことを何度も言う祖母に、私は強く当たってしまっていました。優しくしなければいけないと頭では分かっていても、祖母を目の前にするとなかなかできませんでした。その時、看護師としての知識があれば、祖母のこともっと理解し接することができるのではないかと考えるようになりました。

中学三年生の時、父が糖尿病になりました。毎食後にインスリンを打ちながら仕事を続けていた父は、その後膵臓がんが見つかりました。休むわけにはいかないと放射線治療を続けながら働き続けていましたが、父は日に日にやつれていきました。何かしてあげたいと思うもののどうすれば良いのか、何と声を掛ければ良いのか私には分かりませんでした。いつも笑顔で元気だった父が、ほんの数か月で歩けなくなってしまったのを目の当たりにするのはとても悲しいことでした。その後家で倒れ入院した父は、ほとんど寝たままの状態となってしまいました。既にがんが色々な臓器に転移しており、どうしようもないと聞かされました。最後のお見舞いの日、父はもう話すこともできず荒い息をしていました。明日は学校だからと早めに家に帰った二時間後、父は亡くなりました。

もう少し長くいてあげれば良かった、辛そうにしていた父に何もしてあげられなかったと、父のことを思い出すたびに、今でも私は後悔しています。このことをきっかけに、私は絶対に看護師になろうと強く決意したのです。現在私は、病院での臨地実習に励んでいます。昨年高校二年生の秋に戴帽式を迎えたものの、新型コロナウイルスの影響で実習を実施することができませんでした。高校三年生になって、例年よりも少ない期間ではありますがようやく病院実習を行うことができました。Ⅰクールめには循環器・心臓血管外科病棟での実習、Ⅱクールめには回復期・リハビリテーション病棟での実習が各二週間行われました。

Ⅰクールめの病棟で受け持たせて頂いた患者様は、認知症を患っており、患者様のもとへ行くたびに、自己紹介を繰り返しました。しかし事前に認知症について学んでいたため、祖母の時とは違いどのように接すれば良いかが分かっていました。繰り返しであっても、患者様が不安にならないように配慮することが何よりも大切なことだと改めて学びました。また、同じ話題を繰り返しお話しされていて、患者様についての自分が知りたい情報をなかなか聞き出すことができませんでした。患者様の気分を害することなく話題を切り替える

コミュニケーションが取れる方法を身に付けることも今後の課題の一つだと痛感しました。

Ⅱクールめの病棟で受け持たせて頂いたのは、毎日リハビリテーションを行う患者様でした。腰と左手首を骨折している方で、手首にはまだ痺れがある状態でした。それを少しでも軽減しようと手浴の援助を計画しました。温めることで痺れが軽減すると考えたからです。ですが患者様は「あまり変わらないね。」とおっしゃいました。そこで、もう一度患者様の状態を考え援助を立て直し、改めて足浴を行うことにしました。患者様はリハビリで歩くことが多く、足の疲れを少しでも取ることでより積極的にリハビリに取り組むことができるのではないかと考えたからです。歩行のリハビリの前に足浴を行ったところ、患者様は「ありがとう、気持ちいいよ。」と言ってくださいました。喜んでくださった患者様を見て、私も自然に笑顔になりました。足浴終了後リハビリ中の様子を見学すると、患者様は休憩もせずに歩き続けており、リハビリ担当の方も驚いていました。リハビリ中歩いてみてどうだったかを患者様にお聞きすると、「足が軽くなったみたいで歩きやすかった。」と言ってくださいました。それを聞いて、足浴を行って良かったと安心するとともに、自分の立てた計画が患者様のお役に立ったことに大きな喜びを感じました。

患者様それぞれに合わせた看護を考え、個別性を踏まえた看護を提供することはとても難しいことだということを、実習を通して改めて痛感しました。現在のような情勢の中にあってこのように病院での臨地実習を実施できたのは、たくさんの方々のお陰があったからこそです。本当に感謝しています。小学校の頃からずっと魅力を感じていた看護師という職業。看護師になるまでの道のりは長く険しいものです。しかし、祖母や父の存在、そして患者様の笑顔があったからこそ、私は看護師という目標に向かって歩み続けることができています。これからも諦めることなく頑張っていこうと思います。

高等学校の部　優秀賞

女性養豚経営者を目指して

東京都立瑞穂農芸高等学校　二年
岩倉綾野

私の将来の夢は養豚家になり、自分の農場を経営することです。そのきっかけは、養豚類型に入ったことから始まりました。

都立瑞穂農芸高校の畜産科学科では、私が専攻する養豚類型の他に酪農類型と実用動物類型の合計三つの類型があり、二年生から自分が選択した分野をより専門的に学びます。私が中心に学んでいる豚は、分娩から出荷までのサイクルが速く、分娩に立ち会う機会も多いため、とても多くのことを学ぶことができます。学校では豚の種付けから分娩までの様々な管理に自分で取り組むことができるため、母豚が無事に分娩を終え、子豚たちの元気な姿を見ると私はとてもやりがい

を感じられます。また、生まれたばかりの小さな子豚が無事に大きくなり出荷されていくところを見ていると、とても達成感が得られます。このような経験を通して、私は養豚に魅力を感じ、将来は養豚家になりたいと思い始めました。

しかし、実際に養豚業について調べてみると、国内の養豚業の女性従業者はとても少なく、特に女性の養豚経営者は全体の約一割しかいないという現状を知りました。また、私は畜産業は人々の食卓を陰で支えるとてもかっこいい仕事だと思っていました。ですが、実際には多くの人が「3K」、きつい、きたない、危険というイメージをもっていることを知りました。私はそのようなことを知るにしたがって、この職業は自分には合わないのではないかと一度諦めようとしました。

しかし、ある日、女性農業従事者が八割を超える養豚場の記事を目にしました。そこには、「豚はストレスを感じるとすぐに肉質に影響が出てしまう。そこで、細やかなところまで気配りでき、愛情深く飼育できる女性が育てると、豚はストレスを感じにくく、良質な豚肉ができる。」と書かれていました。そこで私は再び養豚家になりたいと強く決心しました。

もっと女性が働く養豚業の現状について知りたいと考えていたところ、先生から「未来の畜産女子育成プロジェクト」を紹介されました。これは日本中の女子高生がデンマークの畜産について学ぶというプロジェクトでした。そこで、社会的に男女平等の進むデンマークでの畜産はどのように行われているのかを知りたいと思いました。さらに、たくさんの人に畜産の魅力を伝え、畜産の女性従事者が増えるきっかけを作りたいと思い、すぐにプロジェクトに応募し、参加することができました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で実際にデンマークへ行って学ぶことはできず、オンラインでの研修でしたが、とても多くの知識を得ることができました。

まず、デンマークは高福祉国家で、保育施設がとても充実しており、女性も男性も育児休暇を取るのは当たり前でした。育児を家族で分担し、女性が仕事に復帰しやすい環境にありました。これはデンマークが女性進出に成功している大きな理由であると思いました。

次に、デンマークの農業に対する考え方です。デンマークには「男性は農業をすれば力持ちになる。女性が農業をすれば賢くなる。」という言い伝えがありました。この言葉から、性別の違いで得意なことが違うのは当たり前であり、得意なことを伸ばして突き進むのが大事だと私は考えました。実際、デンマークの養豚場では分娩舎で女性が積極的に雇用され、女性の細かな気配りができるという長所を生かして活躍していました。

そして、研修の最終日に私はデンマークの農業学校の先生に「先生が思う女性農業従事者を増やすために大切なことは何ですか？」と質問しました。すると、「あなたたちが良い見本を見せて、見た人に私もこうなりたいと思わせるのです。」と言われました。このメッセージを聞き、養豚家になって働くだけではなく、若い従事者が畜産の魅力をたくさん発信し、女性農業従事者が増えるきっかけを作っていくことも大切な役割だと強く思いました。そのため、まずはこのプロジェクトのアンバサダー活動を通して、畜産の魅力を伝え、

人々がもっている畜産に対するネガティブなイメージの改善に努めていきたいです。

そして、養豚家になって自分の農場を経営する夢を実現するために、高校卒業後は大学に進学し、畜産に関する専門知識や技術をさらに深めるとともに、幅広い視野を身に付けたいと考えています。そのため、残りの高校生活を大切にし、一生懸命勉強に励み、将来の養豚経営者に向けてもっと豚のことについて知り、少しでも多くの人にその魅力を伝えていきたいです。

大島×デザイン＝夢

東京都立大島高等学校　三年
山口　雅人

私には夢があります。

それは、誰もが自然や農業を身近に感じ楽しめる場所を故郷伊豆大島に作ることです。

伊豆大島は自然が豊かでありながら、東京竹芝桟橋から船で一時間四十五分、飛行機では調布から三十分で行き来ができ、都会に一番近いという立地にあります。この条件を活かし、私は大島にエコビレッジを作ることを考えました。エコビレッジとは、世界各国で始まったお互いが支えあう仕組みと、負荷のない工夫を取り入れた暮らし方やコミュニティのことです。建物と自然豊かな大島をリンクさせたデザインができるような建築士になりたいと思っています。

建築デザインを考える上で大事なことは、その土地にあるものを最大限に活用することだと思います。そう考えるに至ったのは、地域を代表する有名な椿油メーカーと連携して行った活動に参加したことがきっかけです。

その会社は伊豆大島の椿油を全国に広げた企業で、椿を守る「椿守カンパニー」としてＣＳＲ活動もされています。「伊豆大島つばき座」という里山保全活動をされていて、椿や椿油が身近にある暮らしや、文化の保全や継承などにも取り組まれています。

私は、一年生の時からこの活動に参加し、剪定や伐採などの椿の森づくり、島の害獣特定外来生物タイワンリスの防除などにも取り組みました。この活動は、環境省の環境活動発表大会で発表し、協賛企業特別賞をいただき、私にとって大きな自信となりました。また、この経験から「土地にあるものを最大限に活かす」ことの大切さを学びました。

もう一点、私が大事にしたいと考えているのはユニバーサルデザインです。ユニバーサルデザインとは、一九八〇年代にアメリカのロナルド・メイス博士が中心となって提唱した「年齢や能力、状況などにかかわらず、できるだけ多くの人が使いやすいように、製品や建物をデザインする」という考え方です。特に重要なのは、「デザインする段階で使いやすさについての考えを取り入れる」という点です。ここが、障壁を後から取り除くバリアフリーとの大きな違いです。

人間は誰でも高齢になっていけば、何かしらの障害が出る

可能性が高まります。それだけに障害がある人の暮らしとは特別なこととするのではなく、誰もが身近な事柄として、とらえられることが大切だと考えます。

高校二年生の時、パラアスリートのゴールボール日本代表選手と交流する機会がありました。ハンデを感じさせない迫力のあるプレーを目の当たりにする一方で、過去には障害があることで辛い思いをし、生き辛さを感じていたということも伺いました。私は、その話を聞き、日本にはどれくらい障害がある人がいるのかが気になり調べました。

内閣府の情報によると、身体障害者四三六万人、知的障害者が一〇八万人、精神障害者が三九二万人で合計するとなんと九三六万人。人口の約七・四％の人が、何かしらの障害とともに生活していることが分かりました。

現在、伊豆大島の年間の来島者数は、約二十万人ですが、かつての伊豆大島の来島者数は八十万人。そのため大島には、まだまだ来島者を受け入れられる余地があります。しかし、今の大島の現状は、障害のある方を受け入れられる体制が十分に整っているとは言えません。

旅行でも移住でも、ハンデのある人を受け入れられるような場所にしていく。誰もが気兼ねなく安心して過ごせる場所や環境を作ること。それこそが、これからの共生社会の実現のために必要なことだと思います。

伊豆大島は現在人口六千人、過疎化と少子高齢化が進んでいます。高齢化が進んでいるという意味でも、ユニバーサルデザインの考え方は大変重要です。観光資源に満ち溢れた伊豆大島にハンデを問わず、世界中から観光客を誘致することも可能だと考えます。観光客が増えれば、大島の産業は発展し、島が活気づくと思います。

以上のことから、私はユニバーサルデザインの重要性を理解した建築士になり、将来は地元伊豆大島で豊かな自然や農業を楽しみながら、多くの人が暮らしたり、訪れたりできる建物やコミュニティを作りたいと考えています。

大島にエコビレッジを作るだけでなく、そこにユニバーサルデザインという考え方を取り入れることで障害の有無を問わず、誰でも同じように、大島の自然を感じたり、楽しんだりすることが可能になると考えます。

立地や土地にあるものに価値を見出し、それらを活用し、誰でも安心して迎え入れることができる場所を作ることができれば、伊豆大島はオンリーワンの場所になると思います。

今、私は課題研究で、子供や車いすの方でも楽しめるイチゴの栽培棚のデザインなど農業体験のあり方や、土地や高齢の作業者に負担をかけない水耕栽培について研究しています。

私は、誰もが自然や農業を楽しめる場所を作れる建築士を目指し、これからも学び続けていきます。

高等学校の部　佳作

子どもたちの明るい未来の実現に向けて

東京都立農業高等学校　二年
樋谷　咲良

数年前、子どもが自爆テロに使われたというニュースを聞き、私は愕然としました。私には弟が二人いますが、弟たちが自爆テロに使われることなど全く想像できません。

ところが、現実世界では、このような悲しいことが起きているのです。なぜ、子どもたちがこのようなことに巻き込まれてしまうのでしょうか。私は、このような悲劇を防ぎたいと強く思いました。

三年前、私は、タイの首都であるバンコクを訪問する機会に恵まれました。

タイは、富裕層と貧困層の格差が世界で二番目に大きく、都心部に高層ビルが立ち並んでいる一方で、バンコクの都心部からそれほど離れていない場所にスラムが点在しています。タイには二千ケ所以上のスラムがあり、そこには二十万人以上の人々が住んでいると言われています。スラムに住む子どもたちは、経済的な事情などで十分な教育を受けることができなかったり、いじめられたりすることもあるそうです。

私は、首都バンコクにある、クロントイ・スラムを訪問しました。クロントイ・スラムは約十万人が暮らす、バンコク最大規模のスラムです。スラムには多くの子どもたちも暮らしていますが、親の仕事を手伝ったり、幼少の兄弟の面倒をみたりするために学校に通えない子どもや、通うことができてもいじめられてしまう子どもがいるとのことでした。

案内してもらったスラムの中はとても衝撃的でした。六畳くらいの狭い部屋に八人で暮らしている家族、建物が古く雨漏りしている家、ありとあらゆるところにゴミが落ちている通路、ゴミがたまって異臭が漂う排水溝など……。日本で暮らしている私には想像を絶する光景でした。

私は、スラムにあるシーカー・アジア財団のボランティア活動に参加しました。シーカー・アジア財団は、スラムや農村などの貧しい子どもたちの教育を支援したり、コミュニティ図書館を運営したりするなど、子どもたちが教育を受けることができる環境づくりに力を入れています。

夕方になると、コミュニティの図書館に子どもたちが集まってきます。私はそこで得意の折り紙を子どもたちに伝授する機会をいただき、折り紙の作品を紹介したり、折り紙の折り方を伝授したりしました。

子どもたちのとても積極的な姿勢に私は心を打たれました。自ら難しい作品作りに挑戦し、もっと教えてほしいと訴えてきたのです。みんな目を輝かせ、とても活き活きとしていました。現地の方によれば、折り紙は、学校で友達に教えたり、一緒に折ったりすることができるため、子ども同士の交流を図ることができ、いじめや孤立を防ぐことができるとのことでした。私はそれを聞いて希望の光が見えました。周

りの子どもたちから尊敬されることで子どもたちが孤立しなくなり、犯罪に巻き込まれるのを防ぐことができるからです。

また、興味をもったことに積極的に取り組む子どもたちを目の当たりにしたことで、子どもたちにやることを強要するのではなく、子どもらの興味を引き出し、彼らが積極的に取り組む環境づくりが大切であることを実感しました。このボランティア活動に参加して、ただ勉強の機会を提供するだけでは不十分であること、子どもたちが自発的に取り組む意欲を引き出す環境を整え、子どもたちに学びたいと思うように動機付けることが大切であると学びました。

いま、世界中で貧困の差や、それにともなう子どもたちの劣悪な生育環境が問題となっています。それにもかかわらず、世の中は、経済的合理性を優先し、弱い者を切り捨てる傾向があるように感じます。

私は、自分の欲のままに生きるのではなく、劣悪な環境に置かれている子どもたちが笑顔になれる明るい未来をもてるようにしたいです。そのためにも、子どもたちのために自分ができることを模索し、勉学に励んでいこうと思います。そして、誰もが心豊かに、笑顔で生きることのできる平和な社会の実現に貢献していきたいです。

私自身と夢の成長

東京都立農業高等学校　二年
松葉晶代

私は自分の夢を叶える為に、農業高校に進んだ。この選択は、私の夢への可能性を大きく広げるものとなった。

私は食品に関して学ぶ学科へ入学し、週に一度実際に製品づくりや実験をする総合実習を行っている。この実習では、普段家で作れるものを応用して作製することから、家では作りにくいものを作ることまで行う。例えば、ジャムやトマトケチャップ、ロールパンなどである。私にとって凄く貴重な体験となっている。

この実習では周りとのコミュニケーションが大切で、一年生の時はとても苦労した。なぜなら、新型コロナウイルスの影響があり中々学校へ行くことが出来なかった私達は、そこまで親交を深められていた訳ではなかったからだ。分散登校の為、ほぼ関わったことがなかったクラスメイトと同じ実習班になった時、私はスムーズに実習を進めることが出来なかった。

二年生になりクラスメイトともだいぶ仲が良くなってきた頃には、実習もスムーズに進むようになっていた。各々が自分から仕事を探して行動し、時には協力し合って作業を進めた。パン作りの実習では、私が分からないところを聞くと

「ここはこうすればいいよ。」などと、分かりやすくアドバイスをくれた。このようにお互いがアドバイスをし合う機会が増え、自分自身もクラスメイトも大きく成長していると感じて嬉しくなった。また、誰かが失敗しても周りがすかさずサポートに回るようになった。これが自然と出来るのは凄いことだと毎回感じている。何より、だんだん上達していく製品を家族に食べてもらうのは物凄く嬉しく、達成感のあるものだ。

食品に関して学びたいと思ったこともあってこの学校に入学し、総合実習の授業を受けているが、この授業は技術面だけではなく、他の面でも私を大きく成長させてくれた。

私は今、生徒会に入り様々な活動をしている。だがこれは、今までの私では考えられないことだった。私は自分の考えを自ら発信したり、主張したりするのはあまり得意ではなかった。そんな私が変われたのは、総合実習があったからだと感じている。総合実習では、常に考えて行動することやチームワークが重要視される。週に一度このような体験をすることで、私の中の様々な可能性が広がったのだ。

まず私は、何か意見を言ってみることにした。そうすると様々な意見が返ってくる。もちろん良い意見だけではなく、良くないところを指摘されることも多々ある。今までの私なら、もうこの時点で意見を続けるのをやめていたが、今の私はそうはしなかったのだ。なぜなら、より良い製品を作りたい、作った製品を笑顔で食べてもらいたい、この気持ちが勝ったからである。私の夢は自分の作った料理で人を笑顔にすることである。その為には多くの食について学び、とにかく料理など技術面のスキルアップが夢への第一歩だと思っていた。だがそれは違い、自分の意見を考え、発信し、また考えること。私はこれこそが夢への第一歩だということに気づいた。

このことに気づいてからは、すべてのことに対し、とにかく意見を言ってみようと思うようになった。その結果、学校の代表として自分達の考えを多くの人に伝えることが出来る立場につくことができたのだ。

私は将来自分の店を持ち、自分の料理で沢山の人を笑顔にしたい。その為にいずれは、ホテルに就職して腕を磨きたいと考えている。食について仕事をするということは、どのような職業でもチームワークは求められるだろう。その時私は、高校生活の三年間で得ることができるであろうチームワークの能力を、最大限に活かしたい。また、職場でもしっかりと自分の意見を発信し、少しでも多く職場に貢献したい。そして沢山の人を笑顔にしたい。具体的ではなかった私の夢を、ここまで具体的にし、夢を叶える第一歩を気づかせ変えてくれた授業に感謝している。正直なところ、ここまで大きく成長できるとは思っていなかった。まだ二年生だが、私自身も私の夢も大きく成長した。残り少なくなってきた高校生活だが、まだまだ学べることは多いはずである。これからも、沢山のことを吸収し成長していき、必ずこの夢を叶えたいと思う。

お弁当開発と販売実習から得たこと

東京都立八丈高等学校　一年
持丸瑠菜

これから実際に島内スーパーマーケットでの就業体験で、何をどのように学んだのかを書きます。

私は高校に入学する前の春休みに、家政科の課題として『販売するための八丈島ならではのお弁当』に取り組み、特産品を調べて考えました。八丈の特産品販売者に聞き取り調査をした結果、私は『明日葉サンドウィッチ』に決めました。その理由は、明日葉は八丈の特産品で身体にも良く、サンドウィッチにすることで子供から高齢者まで形状が食べやすいと考えたからです。

学校で実施したお弁当プロジェクトの投票アンケートの結果、販売するお弁当の一つとして『明日葉サンドウィッチ』が選ばれました。決まった時は嬉しかったです。しかし、実際に島内スーパーマーケットで試作して、社長や業者の方々に試食していただいたところ、「観光のお客様に販売するには明日葉の味が濃すぎる。」とのことで、前半では販売ができなくなりました。そのため、前半は試作と検証を進めることになりました。私は『明日葉サンドウィッチ』を食べやすくするために、具の組み合わせや分量を変えて何度も試作しました。

実習に先立ち、不安が二つありました。それは、仕込みがうまくできるのかということと、先輩に悩みを相談できるかということです。しかし、職場の方々はとても優しく、わからないところは親切に教えてくださったので、何とか初日の仕込みは終わらせることができました。その後の前半の就業体験では、値段をつける機械の使い方や、食材及び器具等の場所や、効率よくできるやり方などを教えていただきました。先生からは、職場の方々との関わり方や、接客の仕方などを学びました。

就業体験一日目の午前は『明日葉サンドウィッチ』の試作や調理の手伝いをして、お弁当を販売しました。午後からは翌日の販売品の仕込みをしました。私はこのたった一日だけで、どれだけお客様を待たせずに出来るのか、どう接客すれば売れるのか、どの時間帯が一番売れて、お弁当の売り切れる数など、多くのことを学びました。

私は頑張って接客をし、お弁当のアピールポイントを説明すると、お客様が「へ～そうなんだ～」や「おいしそうね～」などと言って買ってくださり、頑張って作ってよかったなと思いました。

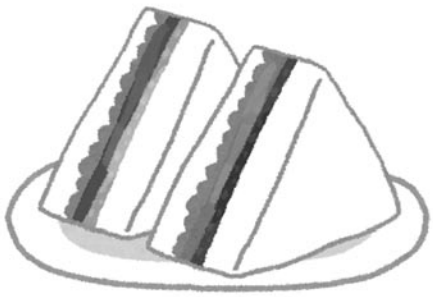
目標販売時間は十二時でした。初めのうちは十二時過ぎ、または十二時ギリギリで販売していたものが、何日か就業体験をさせていただくたびに、少し余裕をもって販売することができていたので良かったです。

就業体験後半では、社長から許可されて遂に『明日葉サンドウィッチ』の販売ができるようになり、嬉しかったです。しかし、就業体験の前半の時とは違い、自分に任された商品

を調理することになったので、のんびり作っている暇など当然なく、自分だけが毎回最後に作り終わるという状況でした。そのうえ、後半の二日目以降からは、店側の要望で販売量が倍になったので、こんなに大変で時間がかかるものなのだと痛感しました。悔しいのですが、目標時間までに販売することができませんでした。だから私は、より早い時間に調理場に来て、『明日葉サンドウィッチ』作りにとりかかりました。そのおかげで、十二時までに販売をすることができました。

私は今回の就業体験を終えて、最初は職場の雰囲気や職場の方々はとても怖くギスギスしているものなのだと思っていたのですが、実際はとても優しく、わからないところは丁寧に教えていただける明るい雰囲気であるのでいい職場なのだなと思いました。

このように気さくに対応し、一人で抱え込まず、わからないところは相談し、しっかりと話し合うことによって、より良い商品やアイデアなどが生まれ、明るく良い雰囲気の職場を作りやすくすることができることを知りました。自分も将来、調理師免許を取って飲食関係の仕事に就き、今回学んだことを活かしていきたいです。



東海上の花彩島～花が彩る島に～

東京都立大島高等学校　三年
山口　海人

「東海上の花彩島」とは、昭和初期に植物学者の牧野富太郎博士が、植物であふれる伊豆大島を見て言った言葉である。私は農林科で学ぶ中でこの言葉を初めて耳にした。

私の住む伊豆大島は、約三百万本のヤブツバキが自生する世界一の椿の島である。冬は島中が紅いじゅうたんのようにヤブツバキの花で覆われる。本校の椿園は教育機関として、世界で初めて「国際優秀つばき園」に認定されており、約三八〇種類、千本以上の園芸品種、原種を私たちの手で管理している。二月から三月の椿まつりには、たくさんの方々がお越しになり、国内のみならず海外からの観光客も多くみられる。生徒による椿ガイドは観光の目玉の一つとして大変好評を得ている。

ヤブツバキに次いで多く自生しているオオシマザクラは、島内に約一八〇万本あるとされ、春には雲や霞のように三原山を白く彩っている。私達はサクラプロジェクトと称し、郷土の原種オオシマザクラはもちろん、その子孫である染井吉野、河津桜など園芸品種の桜を増やす活動を、伊豆大島ジオパークと連携して行っている。

以上の活動の中で、地域に自生する椿や桜などについて学

ぶだけでなく、品種改良技術によって、種間交配、属間交配によって新たな品種もたくさん生み出されているということを知った。

伊豆大島は、自然豊かで椿や桜など自生する花はたくさんあるが、果たして花屋は何軒あるのだろうと考え、調べてみたところ、大島にはたった一軒しかなかった。私はそのことに疑問を抱き、全国、そして大島の花卉産業の現状を農林水産省のホームページで調べてみた。

農林水産省が発表している資料によると、全国の花卉産出額の割合は、全体の五六％がキク、ユリ、バラなどの切り花。二六％が洋ラン、花木類、シクラメンなどの鉢もの。県別の産出額をみると、愛知県、千葉県、福岡県が上位に入っていた。全国的に花卉の販売農家数は、年々減少傾向にあることもわかった。

伊豆大島では、海洋性の温暖な気候を利用した、切り花などの栽培が盛んにおこなわれている。生産額はブバルディア、ガーベラ、旭ハランなどの花卉類が上位を占めていて、中でもブバルディアは大島の農産物を代表する品目である。聞きなれない花ではあるが、大島産のブバルディアは日本の花卉市場において、全国シェア一位となっていることが分かった。一方、大島には耕作放棄地が多く、離島ゆえの輸送コストなどの課題があることも分かった。

私はこの現状を知り、大島の耕作放棄地を活用し、椿や桜はもちろん、世界中の魅力あふれる園芸品種も交えながら、それらの花を活用し、伊豆大島を誰もが知る「東海上の花彩島」にしたいという考えに至った。

現在私は、課題研究で二つのテーマに取り組んでいる。

一つめは、島内の花卉生産の発展を目指した、人工交配による新品種改良と、オリジナル延命剤の開発である。

一年草を使った簡単な人工交配を行い、花粉親と種子親で、そのような形質の違いが出るかデータを集め、このデータを基に新品種開発をすれば、多忙な農家さんでも、狙った目的に合わせた交配が可能になるのではないかと考えた。また、輸送コスト削減と、輸送中の品質管理の向上のために、島内の資源を活用したオリジナル延命剤を開発している。この実験では、市販の延命剤よりも低コストで効果が得られる、材料を模索し実験をしている。これらの研究をすすめて、農家さんの手助けとなりたいと考えている。

二つめの取り組みとして、私自身が花の装飾技術を身に付け、花の魅力を多くの人に伝えることで、花産業の発展を手助けすることができると考えた。

大島はかつて人口が一万人以上、観光客が約八十万という時代があった。しかし現在は人口約六千人、観光客は二十万人と、昔に比べ大幅に減少している。冬の椿、春の桜は有名だが、あまり花の無い時期もある。そんな大島に輝きを取り戻すために、花の魅力を伝えたいと考えた。そこで私は、フラワー装飾技能士三級の資格を取得し、園芸装飾技術を学んだ。

大島の花や今まで農林科で学んだ園芸植物を活用し、茨城県のネモフィラや長崎県の観光施設のチューリップのような観光名所を作りたい。また、花を装飾する技術を活かした花屋を経営し、花を使った体験施設を作り、より多くの人が花

と触れ合える場所を作りたい。そして、一年中花を楽しめる島にする。これが私の夢である。

故郷、伊豆大島を島外の人が移り住んでみたい、観光客が見に行きたいと思ってもらえるような島を目指し、この先、農林科で学んだことを活かしさらに専門的な技術を身に付け、誰もが知っている「東海上の花彩島」を目指し、私はこの大島の力になりたいと強く思っている。

当たり前

東京都立葛飾商業高等学校　三年
篠　原　瑞　稀

私は、時折当たり前は全然当たり前ではないのだな、と感じる時がある。両親が私を高校に通わせてくれたり、両親が家事や仕事をして生活させてくれるように、私はこれらが当たり前ではないのに、感謝を伝えずに生活してしまっている。

私が当たり前が当たり前ではないと感じたきっかけは、私が調理師専門学校への進学を決断した時だ。最初は猛反対されたが、両親は私の将来の夢を聞いて進学させてくれることになった。いざ学校選びを始めると多大な金額が必要になることや、両親へ不安を与えることなど、計り知れないほど迷惑を掛けることを実感した。

私は将来喫茶店を営みたいと思っている。昔から料理やお菓子を家族や友人に振る舞って「美味しい。」と言って喜んでくれることが嬉しい。人が美味しそうに食事をする顔は何故あんなにも幸せそうなのだろうか。私はその喜んだ顔や美味しかったと満腹のお腹をさすりながら喜ぶ反応を見るのが、堪らなく好きなのだ。犬や猫、もちろん他の動物も食事をする。だが、人と動物の大きな違いは「共食」をするかしないかだ。私が人しか共食を行わないことを知ったのは、高校二年生の時だ。本校で沢山の大学、専門学校の先生方が話を聞かせてくれることになった。その時はまだ進学希望ではなかったが、元々お菓子を作ることが好きだった私は、調理師専門学校の先生の話を聞くことにした。最初は専門学校がどんな場所なのか話を聞いたが、先生はその後共食の話をしてくれた。「共食とは、共に食事をすることです。」と言った。何当たり前のことを言っているんだ。そんな冷めたことを思ってしまった。しかし、付け加えて先生は、共食をするのは人だけだ、と教えてくれた。その日の夜、半信半疑だった私はスマートフォンで、「共食人間だけ？」と検索にかけた。様々な記事に目を通してみたが、共食をするのは人類だけだ、と書いてあった。共食の事実を知った私は、だから人の食事をする姿はあんなにも幸せそうで、食事を作った人は嬉しいと思うのだろうと思った。私はその日専門学校へ進学することを決断した。

きっと共食をできるのも当たり前ではなくて、家族団欒で夕食を食べられること、友人とお弁当を食べながらくだらない話が出来ること、私がこうして生きていられるのも当たり前ではないのだ、と高校二年生にしてようやく考えたのだ。

父は私によく「美味い飯を食べられるのは当たり前ではないぞ。感謝して食べなさい。」と言うのだ。最近になって、ようやく父の言っていたことが理解できた気がする。食事を用意してくれる母がいて、食材を売ってくれる人がいて、食材を作ってくれる人が世の中には沢山いる。だが、それは当たり前ではない。普段何気なく言っていた「いただきます・ごちそうさま」という言葉は全ての人や生き物、植物に感謝するためにできた言葉だろう。この言葉に感謝を込めて共食を楽しもうと思う。こんな素晴らしい言葉があることが私は嬉しい。

私は高校三年生になった。必須科目の総合実践という授業が始まり、進路への不安が高まっていた。総合実践とは、事務業務を実践する、つまり社会に出るための勉強だ。私は進級した時からその授業が不安で堪らなかった。失敗を恐れ、怒られることが怖くて堪らない。しかし、ある時私は気付いた。この授業が不安で怖くて堪らないのは、私だけではない。そう思ったのだ。きっと皆不安で押しつぶされそうになりながら、その授業で、社会に出るための勉強をしている。そう思うと、不思議と授業に対する不安はなくなった。私は一人で授業を受けているのではなく、私には仲間がいて、社会に出るために前向きに授業を受けるクラスメイトがいる。しかし、努力する仲間がいることは当たり前ではない。けれど、皆私と同じように一人では叶えられないような夢があって、そのために努力しているのではないか。伝えきれない何かに感謝しながら、今自分自身にできることを精一杯こなしているのではないか。そう思うと楽になった。肩の重い荷物がなくなったようだった。私はその授業で大切なことに気が付けて良かった。決して一人ではないし、私より社会を知っている先生方に教えてもらえている。商業高校へ通っている意味を実感した。私は卒業まで頑張りたい。努力している仲間がいる限り私は諦めない。

失敗を恐れていたら、きっと何も成長しないだろう。当たって砕けるくらいが丁度いいのではないか。時に怒られたっていい。失敗したっていい。私は前進し続けたい。私はせっかく掴んだ夢を手離したくない。それがどんなに難しくて、リスクが高くても。私には喫茶店を開いて沢山の人を幸せにして、笑顔にするという大きな夢がある。高校卒業後の春、専門学校へ通わせてくれる両親に感謝しながら、私は夢に向かって前進し続ける。そして、全てのことに感謝して生きていかなければならない。全ては「当たり前」ではないのだから。

世のため、人のための料理店

東京都立江東商業高等学校　三年
小山　鳳虎

私は、小さい頃から「料理人になって、自分の店を出し、美味しい料理をたくさん食べてもらいたい。」という夢がありました。しかし、中学校で進路を決めるにも、どうしたら夢を叶えられるのかわからず、先生や親から「高校だけは出

ておかないとだめだ。」と言われ、商業高校へ進学することに決めました。店を経営するのに、商業科で学ぶ簿記や会計などが役に立つだろうと思ったからです。入学するとすぐに友だちもでき、アルバイトも始め、「自由で楽しい」高校生活がスタートしました。勉強も、普通科と違って苦手な数学や英語などの単位数も少ないし、中学時代の貯金も少しあったので、一学期の成績は中くらい。担任の先生は「商業高校は進級や卒業が難しいよ。」とホームルームなどでよくおっしゃっていましたが、私は「これならなんとか卒業できるだろう。」と高をくくっていました。それが大きな間違いだったのです。

大して難しくないと甘く考えていた簿記は授業中に少しでも気を抜くと、すぐにわからなくなってしまいます。パソコンの授業も、タイピングからソフトの使い方まで、覚えることがたくさんありました。最初は一緒に遊んでいた友だちが、一人また一人と退学してしまいました。この学校では真面目に勉強しないと大変なことになる、担任の言うことは本当だったと思いました。このまま自分も学校をやめてしまうのかなと諦めかけたこともありましたが、親を悲しませたくないのと、自分の店をもつという夢を叶えたいという気持ちで、とりあえず、授業を集中して受けることから始めました。学年末テスト前は、必死で勉強しました。特に簿記は難しく、クラスメイトに教わったり、一緒に先生に質問したり、放課後の補習も頑張りました。そして、なんとか二年生に進級することができました。

二年生では、選択科目で「広告と販売促進」という授業を受けました。授業内容は、スーパーや飲食店などの広告を制作することです。手描きではなく、パソコンの様々なソフトを使うので、街中のお店においてあるポップのような広告を作ることができます。私は、この選択科目は将来自分でお店を出すのに必要だなと思い、熱心に取り組みました。将来出店したいと考えている飲食店を想像しながら広告を作りました。パソコンでメニューを書いて、親しみやすいデザインを工夫しました。料理は、イラストではなく、本物の写真を載せたいと思いました。インターネット上には美味しそうな料理の写真がたくさんありますが、著作権の関係で使えない場合が多いことも、授業で知ることができました。そこで、自分で料理を作ってその写真を使うことにしました。見栄えのする料理で、なおかつ、自分が得意な料理ということで、ハンバーグとスパゲッティ、オムライスの三品に決め、自宅の台所で作りました。料理は得意なので、簡単に作れると思っていましたが、大間違いでした。まず、食材の買い出しから、味付け、食べ物の盛り方などに思っていた以上に苦労しました。三品の料理を作り、写真に撮り、パソコンに取り込むまで、集中してとても長い期間がかかりました。メニューと写真を組み合わせ、広告が完成したときは、とても嬉しかったです。担当の先生も、「よく頑張ったな。」と褒めてくれました。この出来事をきっかけに、他の授業やテスト勉強も少しずつやる気が出てきました。三年生に進級するころには、自分の将来を具体的に思い描くようになりました。

現在、私は将来自分の店をもつために調理の専門学校への進学を決めています。料理の専門知識や経験は進学先で徹底

的に勉強しなければなりませんが、江東商業での勉強が、店を経営していくためには絶対に役に立つと思っています。一年生のころには、嫌いだった商業科目ですが、どれも店の利益を出したり、お客様に喜んでもらったりするためには、必要です。卒業まで残り僅かとなりましたが、時間を無駄にせず悔いのない高校生活にしたいです。

最後に、私の決意を書いておこうと思います。それは、新型コロナウイルス感染拡大に関係するのですが、私たちの高校生活は、学校が長い間休校になったり、オンライン授業で毎日登校することがなくなったり、体育祭や文化祭、修学旅行でさえも中止になったりと、悲しいことが続き、家族など周囲の人たちから「かわいそうね。」と言われることがよくあります。しかし、私にとってコロナ禍は、将来の夢である「自分の店」をより具体的にイメージさせてくれた出来事でもありました。私の料理店は、いろいろなお客様が安心して来てくれる店です。たくさんの美味しい料理でおもてなしをする店です。もちろん、経営者なので利益を出さなくてはなりません。「世のため、人のためが、もうけにつながる」という言葉を授業で習ったことがあります。ある大会社の社長さんの哲学だそうです。私は、この言葉のような料理店の経営者になりたいと強く決意しています。

自分の料理店を開業するまでは、大変な苦労もあると覚悟していますが、多くの先生からご指導をいただき、友だちと励まし合い、支え合って勉強した日々は、宝物です。そんな高校時代を忘れずに、夢の実現のために前を向いて歩いて行きます。

未来へ向かう

愛国高等学校　二年
北村　愛心

突然ですが、皆さんには将来の夢もしくはこんな人になりたいというような理想の姿はありますか。小さい頃は色々なものに興味をもち、大人になったら〇〇になりたいなどと言っていた記憶が誰しも一度はあるのではないかと思います。私自身、保育園の先生を見て保育士に憧れたり、その他にも様々なことに興味をもっては口にしていました。そこで私の将来の夢と理想の姿について書いていこうと思います。

私の将来の夢。それは看護師になり、病気になった患者様やその家族の痛みに寄り添い、不安を少しでも取り除くことができるようになることです。私が看護師になりたいと思ったのは、中学一年生のときです。偶々、中学校で職業調べという調べ学習をしたときに看護師という職業を調べ、当時の課題を知ったということがきっかけとして挙げられます。

現在私は、夢に向かって半歩進んでいると考えています。高校に入学して早一年。一年前から一般教科に加え、看護師になるための勉強も学んでいます。中学校を卒業し、高校では難しいと思うことや大変だと感じることも多々ありますが、夢を叶えるために必要なことだということが分かっているため、これからも頑張ろうと思っています。また、今年は戴帽式があります。戴帽式に出ることは夢への第一歩であり、

看護学生としてのスタートラインに立つことができます。その戴帽式に出るためには実技、筆記ともに合格しなければなりません。そのために、沢山練習をしたり、ポイントを確認したり、復習をするなどして余裕をもって合格できるように取り組んでいこうと思います。

また昨年の見学実習では、座学だけでは学べないような病棟の雰囲気や患者様との関わり、病棟の看護師さんとの関わりが学べる良い機会でした。大きな病気や怪我をしない限り、なかなか入院施設をもつ病院には行くことがありません。私自身、初めて病棟に入り入院している患者様やその中で働く看護師さんの姿を見ました。コロナ禍の中ということでいつもとは違う中での病院実習で、受け入れてくださった病院関係者の方々や学校の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。病院実習が出来たことに深く感謝をし、実習を通して学んだことや考えたことなど、学びを深められるように努力していきます。

そして私が目指す理想の姿は、周りから信頼され、困っている人に手を差し伸べられるような人になることです。また、常に明るく笑顔で過ごせるような人になりたいとも考えています。そのように思ったのには私の周りに、気軽に何でも話せる友達がいたことです。彼女の周りには、いつも友達が沢山います。そんな彼女は周りをよく見ていて、困っている人がいれば声をかけることのできる力を持っています。この作文を読む人の中には、そんなこと当たり前じゃないかと言う人もいるかもしれません。ですが、皆さんはもし、目の前に困っている人がいたらどうしますか。声をかけるなど、すぐ行動に移せる人はどれ程いるのでしょう。正直、私は迷ってしまうと思います。困ってそうだなとは思っても、もし断られてしまったらどうしよう、迷惑だと思われていないかなどと考えてしまうからです。マイナス思考の自分自身に、よく負の感情を抱いてしまいます。行動に移さなければ何も変わりません。そのことを彼女のおかげで身をもって知ることができました。なかなかすぐには行動に移せないことが多いと思いますが、少しずつでも変わっていけるように努力していこうと思います。私は、周りを見てすぐに行動ができるようになりたいと友達を見て、そのように思いました。

私は、明るく笑顔で過ごすことが自分にとっても周りの人にとっても、幸せなことに繋がるのではないかと考えました。笑顔になることによって、表情が豊かになるばかりではなく、人間関係も豊かになったりするのではないかと思います。また、悩みや不安を抱えている人に少しでも元気を与えられるような行動なのではないかと考えました。それこそは、何気ない行動の一つなのかもしれません。ですがその行動一つで、誰かの何かを良い意味で変えることができれば、これからの社会がより良いものになるのではないでしょうか。以前、国語の授業の題材の中に「笑顔は感染する」というフレーズがありました。皆さんもこのような経験があるのではないでしょうか。それは、笑顔でいる人を見て自分も自然と笑顔になったという経験のことです。また、同じ授業の中で「笑顔を見るのは心地よい」というフレーズもありました。誰しも笑顔を見て嫌だ、不快だとは感じないと思います。だからこそ私はこの言葉を聞いて、自分が笑顔になるという行動一つで誰かが自然と笑顔になれば良いなと思い、このことを大

切にしようと考えました。

私の場合、興味のあることが沢山あり、将来の夢や目標という課題が出ても、あまり悩まずに取り組むことができました。ですが、中には自分が将来何をやりたいのか、どのような職に就きたいのかが思い浮かばないという人もいるのではないでしょうか。そのようなとき、焦らずじっくりと自分の好きなこと、興味があることを知ることが大切になってくるのだと思います。興味があることや好きなことでない限り、長続きはしないでしょう。ですから、様々な職種を調べ自分のこれまでの経験をもとに考えてみるのも、一つの手なのではないでしょうか。自分に合った職種、なりたいと思うような職種が必ずあると思います。今、すぐに決めなくてはならないものではありません。これからゆっくり考えていけば良いのです。私自身もこれから、将来の夢である看護師になれるよう、精一杯勉強に励んでいきます。理想の姿になるために。

将来について

愛国高等学校　三年
永田郁月

本校の衛生看護科に入学し、約二年半の月日が経ちました。学内での座学や演習はもちろんのこと、実際に病院で患者様を受け持たせて頂いての臨地実習など、看護師になるという目標に向かって様々なことを学び、経験してきました。

中学三年生になり周りの皆が将来の目標に少しでも近づこうと着々と受験校を決定する中、私は立ち止まったままでした。なぜなら、特にこれといった将来の夢がなかったからです。そんな私に看護師を勧めてくれたのは両親でした。実際に看護学生として勉強し始めると、難しい専門用語や大量の課題、実習や記録など、看護師への道のりにはたくさんの壁が立ちはだかっていました。しかし、その壁を乗り越えるたびに、看護師という職業の魅力に気づかされ、将来の夢として確固たる物になっていきました。看護師と一口で言ってもその種類は様々で、その中で私は、救急看護師に強い憧れを抱き日々勉学に励んでいます。

看護師は患者様の一番近くに寄り添う職業です。私は中学二年生の時に父方の祖父を膵臓がんで亡くし、高校一年生の時には母方の祖父を胃がんで亡くしました。父方の祖父は治療に前向きではなく、余命宣告をされてからというものどんどんと弱っていき最期は病院のベッドで亡くなりました。し

かし、母方の祖父はとても前向きで、余命宣告をされ入退院を繰り返しながらもイタリア語を勉強し始めるなど生きようとする気持ちが強く、医師に宣告された期間よりも更に二年ほど長く生きることができました。気持ちのもちようでこんなにも命の長さが変わるのかと、私は強く思いました。

疾患も置かれている環境も人それぞれ。ですから、気持ちの面だけで命の長さが大きく左右されるとは一概には言えません。しかし、少なからず関わりはあるのではないかと私は思うのです。そう考えると、衣類の着脱や清拭など目に見えることはもちろん、気持ちの面からも患者様の一番近くに寄り添い支えることができるのが看護師なのではないかと気がつきました。病気になれば誰でもネガティブな考えに陥ってしまうでしょう。余命宣告を受ければなおさらです。しかし、私が二人の祖父にもっともっと長生きして欲しいと願ったように、患者様一人一人にも、その方を大事に思い、延命を願うご家族を始めとした大勢の方がいらっしゃいます。延命が必ずしも幸せだとは言い切れません。それでも、一人でも多くの人たちに長く、そして幸せに生きて欲しい。だからこそ私は、看護師を目指すのです。

先日起きた小田急線車内での刺殺事件。その際の様子を収めた動画を見ました。突然の恐ろしい出来事に車内は大変なパニック状態でした。ところがそんな中、「空けてください、怪我人がいます。押さないで。救急関係の方はいませんか？止血をしたいです。タオルを持っている方はいませんか？」としきりに叫んでいる女性の声が聞こえてきました。自分も刺される可能性があるはずなのに、勇敢にもその場にとどまり救護している女性。動画内ではその姿を見ることはできませんでしたが、私はその女性に心を奪われました。なぜなら、私の目指しているのが、救急の現場で働く看護師だからです。突発的な出来事にも迅速に対応し、目の前の病人や怪我人を必死に救護していたこの女性を、私はとても尊敬しています。そして、自分もそんなふうに行動することのできる看護師になりたいと強く思いました。

救急の場面での看護とは、その後の患者様の病状に大きく影響するものであり、だからこそより多くの知識と経験が必要だと思います。現在私たちは、病院でも臨地実習の最中ですが、新型コロナウイルスの影響で、例年よりも短い期間での実習となってしまいました。しかし、このような情勢の中にあってもこうして実習を行うことができるのは、多くの方々のご協力があったお陰だと心から感謝しています。看護師という将来の夢に向かって、これからも一生懸命歩んでいこうと思います。

実習を通して

愛国高等学校　三年
濱口　瞳

「いよいよこの日が来たね。緊張するね。」
「患者様にあった看護ができるか不安だよね。」
「頑張ろうね。」
朝、友達とそんな挨拶を交わした。この日から二週間、い

よいよ私たちの病院実習が始まろうとしていた。

実習病院の控え室に着くと、限られた時間内で着替え、記録の提出と修正、行動計画など様々な準備を始めた。身だしなみは相手に与える第一印象に大きく関わる大切なものであるため、グループの仲間同士で入念に確認を行った。また、実施したい援助の計画や行動計画の記録を担当の先生に提出。プライバシーへの配慮など、私たち学生の視点のみでは気づかない細かい点を指摘していただいた。修正や追加を行うことで、更に観察点を見つけることができた。病棟に向かう前のこの準備時間は、とても大切なものであると強く感じた。

病院実習初日、不安や緊張を抱きながら病棟を見て回っていた際、看護師同士が情報共有をしているところを目にした。共有内容は非常に簡潔にまとめられており、専門用語がたくさん飛び交っていた。学校では耳にしない言葉もあり、さらに不安が募った。午後、受け持たせていただく患者様のところへ行き、挨拶をした。私たち学生を快く引き受けてくださった患者様に感謝の気持ちを抱くとともに、このような貴重な時間を絶対に無駄にしないようにしようと、強く決心した。この日患者様には、バイタルサイン測定を行わせていただいた。友達などを相手に練習はたくさん行っていたが、実際に患者様に実施させていただくのは今回が二度目で、緊張と不安でいっぱいだった。しかしその気持ちは徐々に消えていった。それは、患者様が掛けてくださった言葉のお陰だった。「そんなに緊張しなくても大丈夫。失敗しても怒ったりしないからたくさん学んでいってね。」今できることを最大限に発揮し、たくさんの経験をさせていただこうと決めて、私は測定に臨んだ。指導者の方が行った測定値との大きなずれもなく、手技も大丈夫そうだと言っていただくことができ、ほんの少しではあったが自信を抱くことができた。

あっという間に実習初日は終了した。帰宅後は早速患者様の情報の整理、追加学習、記録の記入をし、翌日の行動計画を立てた。とても刺激的で、色々なことを考え感じたと同時に、これから頑張らなければという気持ちがわき上がってきた一日だった。

実習二日目。この日は自分が実施したいと思っているケアの見学を主に行った。清潔ケアでは素早いケアを行っていた。素早いケアは患者様の体力消耗を少なくする上でも当然必要なことだが、看護師は、患者様のプライバシーと羞恥心への配慮を欠かすことなくそれを行っていた。その様子を目の当たりにし、現場で働く看護師のすごさを感じた。

実習三日目。この日からは見学よりも実際にケアを行うことが主となった。指示を待つのではなく自分から動く力が求められたと感じた。安全安楽なケアを行うには、事前準備の大切さ、援助計画の必要性を改めて痛感した。先生方がなぜ援助計画を行動レベルで細かく書くようにと言っていたのか、身をもって理解できた。実際に患者様を目の前にすると、自信のなさから恐怖心と不安が大きくなり、思うように援助が進められなかったからだ。しかしそれらは、ケアを行わせていただいている患者様にも伝わってしまう。初めから自信をもって完璧になどできるはずはないが、少しずつでもできるようになるために、このような実習を行わせていただいているのだ。何度も何度でも挑戦しようと思った。帰宅後はそ

の日一日を振り返り、次はこうしようとイメージトレーニングも行った。看護師になるのは大変だと強く思いながらも、たくさんのことを学べる毎日に楽しさを感じた。

様々なことを学びながら、最終日を迎えた。長いようであっという間の期間だった。担当させていただいた患者様の退院を見届けることができなかったことは残念だったが、関わってくださった多くの方々への感謝で胸がいっぱいになった一日だった。

この病院実習を通して、私は本当に多くのことを得た。どんなに不安で辛いことがあってもプラスに考えることができる精神面、事前学習から看護を提供するに当たっての知識と技術の必要性、病院の方々や患者様、先生方や仲間たちへの感謝の気持ちなど。このような情勢の中でこうして実習を行うことができたのは決して当たり前ではないということを心に刻むとともに、看護師と言う将来の夢に向かってさらに努力を怠ることなく一歩一歩進んでいこうと、改めて強く決心することができたとても貴重な体験だった。

障害と向き合う

京華商業高等学校　二年
鈴木千夏

「障害」と聞いて何を感じるか。私は小学生くらいの頃まで障害者に対して可哀想や、怖いという気持ちをもっていた。その気持ちが変わったのは小学校五年生の時だった。私はプロ野球チームの埼玉西武ライオンズが大好きで毎年球場に行き応援している。そんな大好きな西武ライオンズが二〇一三年に日本車椅子ソフトボール協会のスペシャルサポーターに就任し、同じ野球型スポーツの車椅子ソフトボールを支援した。その二年後の二〇一五年にはプロ野球球団初の主催となる「ライオンズカップ車椅子ソフトボール大会」を開催した。色んな縁があり、車椅子ソフトボール大会のボランティアに父と一緒に二日間とも参加させてもらった。最初は自分の大好きな球団に関われるからという軽い気持ちで参加していた。

当日会場に着いた時のことを今でもよく覚えている。会場には足に義足を着けている人や、両足がなく車椅子に乗っている人、片手がなく、もう片方の手だけで車椅子を漕いでいる人、松葉杖をついている人などさまざまな人がいた。その光景を見たときに真っ先に怖いと思った。当時五年生で周りに障害のある人がいなく、障害とは無縁で過ごしていた私には衝撃的だった。ボランティアで参加しているのに怖くて選手たちの手伝いもできず、一日目は車椅子ソフトボール大会の試合をただ見ているだけで終わってしまった。

二日目はインターンで来ていた大学生のボランティアの方たちと一緒に仕事はできたけどやっぱりまだ怖くて選手と話したり関わることはできなかった。自分の仕事を終えて大会の決勝戦の試合を一人で観ているときに一人の選手に「自販機ってどこにある？」と声をかけられた。自販機の場所まで選手を案内した。

その選手は私がボランティアで参加していることを一日目

から知っていたらしく、まだ小学生なのにボランティアに参加していることを褒めてくれた。でも私は怖くて選手の顔すらまともに見れず、ただ話を聞くだけだった。自販機まで案内して元の場所に戻ろうとした時に選手に言われた言葉を今でもよく覚えている。「俺たちって周りから見たら怖いとか可哀想とかって思うかもしれないけど、俺たちはそんなこと思ってないんだよ。」その言葉を聞いて私は何も言えなかった。その選手は事故に遭って脚を切り落とし車椅子生活を余儀なくされていた。何も言えない私に選手は続けて話してくれた。「正直、事故に遭わなければもっと色んなことをやれていたと思うし今でも事故に遭った日のことを思い出すこともある。でも今は今ですごい楽しいんだよ。他の選手の表情を見て。みんな楽しそうに試合してるでしょ。」その話を聞いて他の選手たちの顔を見た。その選手が言ったとおり、みんな楽しそうに笑顔でイキイキと試合をしていた。選手たちを見ている私に話を続けてくれた。「俺たちは自分でこういう大会を開くことはできないし手伝ってくれる人がいるから楽しく過ごせる。だからボランティアに参加してくれてありがとう。」私はその話を聞いて障害に対する思いが変わった。そこからまたその選手と一緒に話をしながら元の場所に戻った。最後に「また来年もボランティア来てね。」って言ってくれた。その言葉がすごく嬉しくて次の年もライオンズカップのボランティアに参加した。

一年目の時は好きな球団に関われるからという理由で参加していたボランティアだったが、二年目は選手の手伝いをしたいと思い参加した。一年目よりもボランティアの仕事に積極的に取り組むことができ、選手たちと関わることも増えた。一年目に声をかけてくれた選手に誘われて、体験コーナーの人数合わせで実際に車椅子に乗って試合をすることになった。試合で使う車椅子は競技用の物で普通の車椅子とは違って、スピードもすごく出た。

試合をしていく中で車椅子に乗ってスポーツをすることがどれだけ大変かを感じた。バットを振ることや、ボールを投げること、守備をすること、全てが難しかった。次の日には腕が筋肉痛になった。でも選手たちの立場になれて、普段できないような体験ができて嬉しかった。そこから他の選手にも話しかけてもらえることが増え、もっと選手の役に立ちたいと思うようになり、毎年大会のボランティアに参加している。中学生になってからは試合のアナウンス、大会の開閉会式の司会を球団側からお願いされるようにもなり、少しでも自分に自信がもてるようになった。

私はこのボランティアに参加し続けて良かったと思う。自分から何かを行動することの大切さや、車椅子生活で目標をもって生活している人の凄さなどを選手たちから学ぶことがたくさんあったり、他ではできない貴重な体験ができ、自分自身大きく成長できたと思う。まだ車椅子ソフトボールはパラリンピックの正式種目には入ってなくて、世界的にこのスポーツの知名度は低いかもしれないけど、

車椅子ソフトボールが広まってパラリンピックの正式種目に入ることを楽しみにしているし、今後もこういうボランティア活動に積極的に参加していきたいと思う。

私の目指す教師像

京華商業高等学校　三年
矢野　和加菜

オール三以下の落ちこぼれ。周りからも諦められ、自分でも「私は勉強できないんだ。」そう思っていた。小テストと定期テストに取り組む姿勢の区別もつかないような、そんな状態だった中学生の私は、言うまでもなく勉強が苦手だった。やり方がわからなければ、勉強することの意味もわからない。なぜ毎日のように学校へ行き、一日のほとんどの時間を座って話を聞いて過ごさなければいけないのか、と疑問に思っていたのを覚えている。

そんな私を変えてくれたのが今の高校の先生方だ。入学当初、中学校からの友達が誰もいなく、不安ばかりで始まった高校生活。幸運にもクラスメイトに恵まれ、校外授業や球技大会も力を合わせて楽しく頑張れた。そんな後に訪れた高校生初めての定期テスト。どうやって勉強したら良いのかがわからなく、諦めていた反面、高校一年生を新たなスタート地点として一から頑張っていきたいという思いとで葛藤していた。諦めてしまえば簡単な話で、今までのように勉強せずにいればいい。ただ時間が過ぎるのを待ち、何事もなかったかのようにテストを迎え、テストを終える。何て楽な選択だろう。前者を選ぼうと思っていたそんな時「新しく学んだことなんだからスタート地点はみんな同じ。ゆっくりでいい。結果が思うように付いてこなくてもそれまでの過程が自分の力になるから。」担任の先生の言葉だった。今まで勉強では相手にされなかった私を救ってくれた。それは想像していた以上に嬉しく温かさをもっていて「ああ、私はこんな言葉を待っていたんだ。」と鳥肌が立つくらい感動し、大きな原動力になった。それからというもの、各教科の先生に中学校の基礎から教えてもらいに行き、一から学んだ。どの先生も嫌な顔ひとつせず理解できるようになるまで、基礎問題から発展問題まで解けるように、何時間も何日もかけて教えてくれた。

そんな中でも特に周りと差をつけたいと思ったのが商業科目だった。商業高校だからこそ学べる簿記、経済、情報はまさにスタート地点が同じであり、理解することは検定取得にも繋がる大きな一歩であった。初めて聞く言葉、数式ばかり。全てがわからない状態で何から手を付けたらいいのかと諦めてしまいそうになっている時に、声をかけてくれた。先生だった。周りはどんどん問題を解いているのに何一つ解けていない私は、先生に聞くことすら恥ずかしく感じていた中、どこから解けばよいのか、単語一つ一つの意味、問題がもっている法則、覚えることが多すぎて、できていない自分が嫌になりそうだった。そんな時「焦らなくて大丈夫。」先生がくれたその言葉はとても温かく、すごく優しかった。先生方が授

業中も放課後も予習復習も丁寧に教えてくれたおかげで自然と机に向かう習慣がつき、初めて見る問題を自分の力で解けた時には、今まで感じたことのない喜びを感じたのを今でも鮮明に覚えている。その喜びは決して消えることなく、今も新しい問題を解くたびに感じることができる。理解することはこんなにも人の心を変え、前進させてくれるのだと思った。そんな初めての経験をして臨んだ中間テストの結果は、クラスの上位に入るくらいの点数を取ることができた。嬉しかった。初めて「勉強して良かった。」そう思うことができた。何より嬉しかったのが、テストの問題を公式や法則を使い、自分の力で解けることだった。

「この問題どうやって解くの？」隣の子の言葉だった。私は最初、この言葉が自分に向けられているのかわからなかった。今まで人から教えてほしいなんて言われたことがなかったから。私が先生から教えてもらったようにゆっくり理解してもらうまで説明し、自分のまとめたノートを見せながら公式を使って解いてもらう。その問題が解けたら違う問題にも挑戦してみる。問題が解けた彼女は嬉しそうに「すごい！これずっとわからなかったのにできるようになった。すごく嬉しい。ありがとう。」と笑顔でその言葉をかけてくれた。初めて人に教える経験をした私は、自分が説明したのを理解してもらうことの喜び、やりがい、達成感をその瞬間に体で感じた。人に教えることで、インプットしたものをアウトプットすることができ、より自分の力にも繋がることも嬉しかった。

勉強で人と人との関係が築けるなんて思ってもいなかった私は「勉強することの楽しさ、無限性を伝えていきたい。私に夢を与えてくれた先生方のように、私も子供たちに夢を与える教師になりたい。」そう強く思った。先生方がくれた数々の言葉、優しい笑顔、たくさんの自信を与えてくれ、ここまで成長させてくれた思いをもち、次は私自身の手で、たくさんの自信と輝いた笑顔が溢れる生徒を育てていく、それが私の目指す教師像だ。

専修学校の部　優秀賞

アスリートの活躍を食で支える現場体験

二葉栄養専門学校　一年
森　下　さおり

「おはようございます！」「行ってらっしゃい！」「お疲れ様でした！」。明るい掛け声が響く。

ここは、今夏、東京で開催された国際的スポーツ大会の参加者宿泊施設内にあるメインダイニングのスタッフ更衣室だ。専門学校の調理師科一年の夏休み、私は、ここでのアルバイトを経験した。

食堂は二十四時間営業。多様な宗教、嗜好にあわせた食事を日に三万食も提供する「食のダイバーシティー」の最前線の現場だ。当然、働くスタッフの数もセクションも多く、ピーク時には一日あたり千数百人のスタッフが働き、その全員がこの更衣室を利用する。

更衣室は、単なる着替え部屋ではなく、大人数が働く食堂の「安全・衛生・コンプライアンス」の拠点でもある。担当セクションやサイズによって何種類にも分かれるユニフォームの整備やロッカーの管理はもちろんのこと、忘れ物の保管、出退勤データ修正の受付、コロナ感染予防のための物品の除菌、清掃、現場に向かうスタッフの身だしなみや持込物の確認、と更衣室の業務は多岐にわたる。また、繁忙期には、食器洗浄や従業員食堂の配膳のヘルプに入ることもある。更衣室スタッフは皆、気配り、目配りができ、柔軟かつ自発的に仕事のできる人ばかりだ。

私の通う専門学校では、例年、八月上旬に一週間の校外実習がある。しかしながら、今年は、新型コロナウイルス感染予防のため取りやめになってしまった。卒業後の進路選択や適性判断の重要な機会でもあり、非常に残念であったが、それだけに、この巨大ダイニングでの二カ月間の業務経験は、貴重な現場実習の機会となった。調理師を目指す学生としては、調理場を経験させていただくことも重要だろうが、調理や提供を取り巻く様々な業務、施設管理、人員管理、食品の安全衛生管理やハサップ対応等、ごく浅くではあるが、少し広い視点で飲食産業の現場を見られるまたとない機会となり、非常に有意義だった。

そして、学校の調理実習で先生方が常々強調される現場でのコミュニケーションの重要性も、日々実感できた。更衣室内の物品管理や利用ルールは、出勤者数や状況に応じてしばしば見直しが行われる。そのため、二十四時間体制の中の各シフト間での連絡と情報共有が重要で、トラブル対応事例の共有を含め、円滑に行うことが必要だった。また、冒頭に紹介した出退勤者への声掛けも、「選手の活躍を食で支える」という共通の目的をもって集まった幅広い年齢や職種の方々に、気持ちよく、また安全に業務にあたっていただくための基本的なコミュニケーションであり、更衣室スタッフの重要な役割だった。

調理師学校一年生とはいっても、私は今年三月に前職を定年退職した還暦の学生で、クラスの中では断トツの高齢者だ。前職での三十数年間の勤務期間の大半は、国際協力の現場（現地）で活躍する人たちを縁の下で支える立場にあり、総合職＝何でも屋だった。ダイニングは大会参加選手の活躍を食の面から支えるが、更衣室の業務は、そのダイニングのスタッフの安全と安心を支える縁の下の力持ちの存在だ。そのため、前職での経験も活かせ、調理よりも「即戦力」になれたのではないだろうか。選手たちと接する機会はないが、選手たちが発信する「おいしい！」「食堂スタッフの笑顔が素敵！」というＳＮＳの笑顔の写真やコメントは、私たちの励みにもなり、とても幸せな気持ちになった。

調理師学校に入学して四カ月。サラリーマン時代と比べると、時間的にも学生という立場的にも余裕綽々のはずが、とんでもない。年齢差の中での緊張もあるし、重い包丁や調理道具の扱いにもまだ慣れない。なんとか、前期課程を追試なしで乗り越えたところだ。

苦戦の四カ月ではあったが、調理師学校に入ったことで多くの経験や気づきを、学校やクラスメイトから得ることができている。

クラスメイトの大半は高校卒業したばかり、または、二年間の栄養士コースを経て調理師科に進んだ二十歳前後の若者だ。専門学校進学を選んだ理由は様々だろうが、明確に目的と職業分野を定めて進学先を選択している。偏差値や知名度を「何を学び、どういう職業に就くのか」よりも重視して大学選びをする場合もある中、なんと頼もしいことか。目的を明確に共有できているからだろう。出欠や規則が厳しく、ある意味窮屈な専門学校の生活に、オンとオフの切り替えを上手にしつつ適応している。個人主義で他人に関心のない人が増えている中、欠席が続く仲間を案ずる思いやりもある。

そんなクラスメイトの姿勢に、人生経験は三倍以上あるのに、私の方が教えられることが多い。進歩より後退の多い年齢だが、若い同級生から刺激をもらい、「進歩」の時間をもてていることは幸せなことだ。

練習に付き合い、三食、オムレツや大根の千切りが続いても、文句を言わずに食べ、批評をしてくれる夫にも感謝している。

卒業後は、学生スポーツや子どもの食育に直接関われる現場で働きたいと考えている。

サラリーマン時代から、仕事を「楽しく（楽しそうに）する」「楽しいものにする」ことを大切にしてきた。あと半年、基本的な調理技術はもちろん、食品衛生、公衆衛生といった関連知識をしっかり身に付け、調理を仕事とする＝調理でお金をもらう責任をきちんと果たせるようになりたい。そのうえで、「楽しそうに働いている」と周囲に感じてもらい、お腹も心も満たせる調理師を目指している。

イラストの部　イラスト賞

「明日に生きる」第三十二号表紙デザイン

江戸川区立松江第五中学校　三年
吉岡綾香

表彰式（令和３年12月17日、東京商工会議所）

表彰式の会場

二宮さんの朗読

齊藤さんの朗読

佐川選考委員長の講評

令和３年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

〈中学校の部〉

番号	設置者	学校名	応募者数	入選者数
1	中央区	銀座中学校	4	2
2		晴海中学校	1	
3	新宿区	西早稲田中学校	2	
4	文京区	第九中学校	1	
5	墨田区	両国中学校	7	
6		寺島中学校	6	1
7	大田区	大森第六中学校	10	2
8		六郷中学校	6	2
9	杉並区	松渓中学校	2	
10	北区	稲付中学校	10	
11		赤羽岩淵中学校	10	3
12		桐ケ丘中学校	2	1
13		滝野川紅葉中学校	1	
14	荒川区	南千住第二中学校	3	
15	足立区	江南中学校	1	1
16		西新井中学校	10	
17		千寿桜堤中学校	7	1
18	江戸川区	松江第四中学校	10	
19		松江第五中学校	2	1
20	調布市	第八中学校	10	1
21	町田市	真光寺中学校	10	3
22	羽村市	羽村第二中学校	1	
23	都立	大泉高等学校附属中学校	2	
24		武蔵高等学校附属中学校	1	1
25	私立	愛国中学校	3	
合計			122	19

〈高等学校・専修学校等の部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立農産高等学校	7	
2	東京都立農芸高等学校	8	
3	東京都立農業高等学校	10	2
4	東京都立瑞穂農芸高等学校	6	1
5	東京都立八丈高等学校	2	1
6	東京都立大島高等学校	4	2
7	東京都立葛飾商業高等学校	10	1
8	東京都立江東商業高等学校	4	1
9	東京都立忍岡高等学校	10	
10	愛国高等学校	9	4
11	京華商業高等学校	10	2
12	国際共立学園高等専修学校	10	
小計		90	14
1	二葉栄養専門学校	1	1
小計		1	1
合計		91	15

〈まとめ〉

番号	区分	応募校数	応募者数	入選者数
1	中学校	25	122	19
2	高等学校	12	90	14
3	専修学校	1	1	1
合計		38	213	34

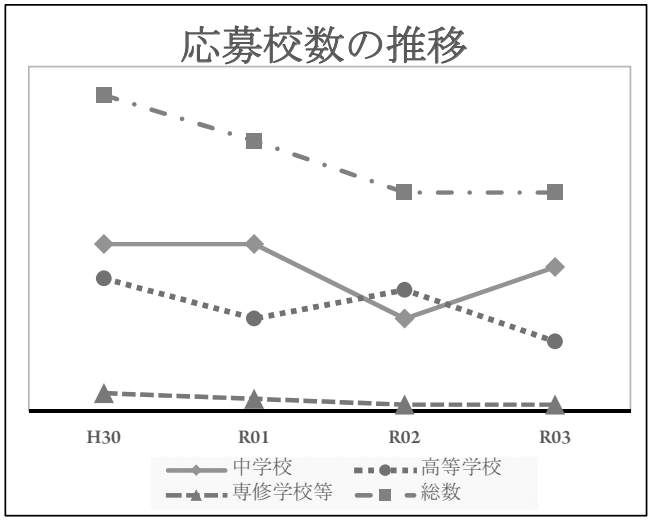
〈イラストの部〉

番号	区分	学校名	応募者数	入選者数
1	世田谷区	上祖師谷中学校	7	
2	江戸川区	松江第五中学校	2	1
合計			9	1

応募校数・応募者数・入選者数の推移

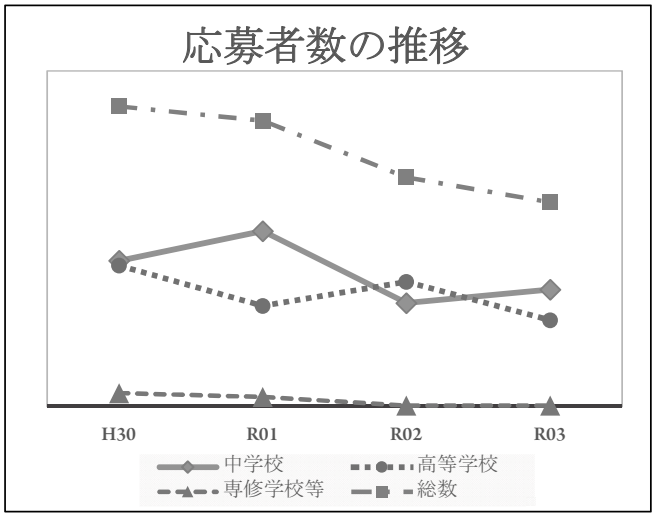
①応募校数の推移

校種	H30	R01	R02	R03	平均
中学校	29	29	16	25	25
高等学校	23	16	21	12	18
専修学校等	3	2	1	1	2
合計	55	47	38	38	45



②応募者数の推移

校種	H30	R01	R02	R03	平均
中学校	152	183	108	122	141
高等学校	147	105	130	90	118
専修学校等	14	10	1	1	7
合計	313	298	239	213	266



③入選者数の推移

校種	平成 30(2018)年度			令和元(2019)年度			令和 2(2020)年度			令和 3(2021)年度			平均 %
	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	
中学校	152	22	14	183	19	10	108	18	17	122	19	16	14
高等学校	147	22	15	105	15	14	130	20	15	90	14	16	15
専修学校等	14	2	14	10	3	30	1	1	100	1	1	100	61
合計	313	46	15	298	37	12	239	39	16	213	34	16	15

作文のテーマ別応募者数一覧

①作文の内容

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

〇中学校における技術・家庭科の学習

〇高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習

〇勤労に関わる体験的な学習

②テーマ

作文の内容について、次のテーマ番号（ア～コ）から関係するものを選択し記述する。

ア　授業等を通して学び得たこと

イ　就業体験や現場実習等によって学び得たこと

ウ　職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと

エ　つくることの喜び、ものづくりの喜び

オ　働くことの喜び

カ　学習に対する心構え

キ　私の生きがい

ク　私の進路、将来の夢

ケ　私の職業観

コ　その他（産業教育に関わる内容のもの）

③テーマ別応募数とその割合

テーマ番号	中学校の部						高等学校の部						専修学校等の部					
	R01		R02		R03		R01		R02		R03		R01		R02		R03	
	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）	応募数	（割合）
ア	13	(7%)	8	(7%)	23	(19%)	32	(30%)	38	(29%)	27	(30%)	1	(10%)	0	(0%)	0	(0%)
イ	4	(2%)	21	(19%)	0	(0%)	7	(7%)	6	(5%)	7	(8%)	1	(10%)	0	(0%)	1	(100%)
ウ	93	(51%)	16	(15%)	13	(11%)	0	(0%)	11	(8%)	3	(3%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
エ	11	(6%)	5	(5%)	13	(11%)	2	(2%)	2	(2%)	3	(3%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
オ	8	(4%)	1	(1%)	4	(3%)	1	(1%)	1	(1%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
カ	2	(1%)	3	(3%)	2	(2%)	2	(2%)	4	(3%)	3	(3%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
キ	4	(2%)	2	(2%)	12	(10%)	0	(0%)	10	(8%)	6	(7%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
ク	35	(19%)	34	(31%)	45	(37%)	45	(43%)	45	(35%)	36	(40%)	3	(30%)	1	(100%)	0	(0%)
ケ	4	(2%)	12	(11%)	5	(4%)	6	(6%)	6	(5%)	1	(1%)	2	(20%)	0	(0%)	0	(0%)
コ	9	(5%)	6	(6%)	5	(4%)	10	(10%)	7	(5%)	4	(4%)	3	(30%)	0	(0%)	0	(0%)
計	183	(100%)	108	(100%)	122	(100%)	105	(100%)	130	(100%)	90	(100%)	10	(100%)	1	(100%)	1	(100%)

【校内掲示用】

令和３年度　東京都産業教育振興会主催・東京商工会議所後援

「作文コンクール」作品募集

応募資格

- 【中学校の部】東京都内の中学校、中等教育学校の前期課程、義務教育学校の後期課程（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍する生徒。
- 【高等学校・専修学校等の部】東京都内の高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍し、産業教育に関する教科・科目を履修している生徒及び学生。

作文の内容

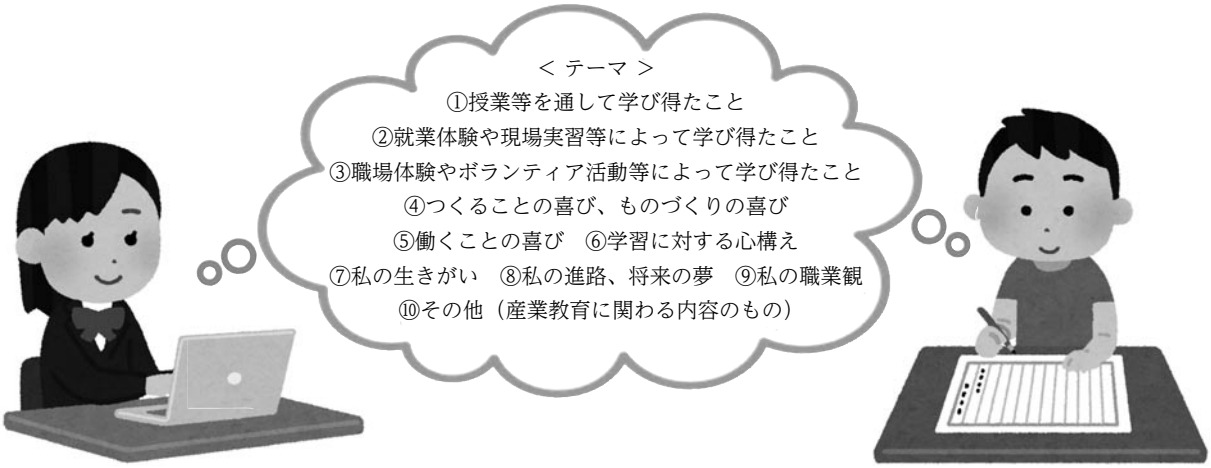
- 中学校の技術・家庭科、高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等における専門教科の学習、または勤労に関わる体験的な学習を通して、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。
- 400 字詰め原稿用紙（原則 A4 判・20 字× 20 行・縦書き）４～６枚。パソコン等による原稿可。B4 判原稿用紙可。

応募締切り

- 令和３年９月 15 日（水）
  ※作品は学校ごとに取りまとめて応募します。
  - 校内の応募締切り　令和３年　　月　　日（　　）
  - 担当の先生　　先生

入選・発表

- 選考結果は、11 月中旬頃に、校長先生を通して連絡します。
- 入選者には、12 月に行われる表彰式において賞状及び賞品を贈呈します。
- 入選した作品は、入選作品集『明日に生きる』（第 32 号）に掲載します。なお、作品は返却しません。また、作品の著作権は本会に帰属します。



令和3年度　作文選考委員名簿（順不同・敬称略）

中学校の部

委員長	江東区立深川第一中学校	校長	佐川明夫
委員	狛江市立狛江第二中学校	校長	猪瀬政幸
委員	中央区立銀座中学校	副校長	磯田耕司
委員	江戸川区立松江第五中学校	副校長	濱川一彦
委員	世田谷区立上祖師谷中学校	副校長	毛利慎治
委員	町田市立真光寺中学校	校長	矢島加都美
委員	小金井市立小金井第二中学校	校長	川井まさよ
委員	足立区立伊興中学校	校長	千葉千登勢
委員	荒川区立第五峡田小学校	校長	出井玲子
委員	調布市立調布中学校	副校長	北島陽子
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	宮西真
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	笠井淳子

高等学校・専修学校等の部

委員長	東京都立農業高等学校	校長	齋藤義弘
委員	東京都立多摩工業高等学校	校長	釼持利治
委員	東京都立荒川商業高等学校	校長	新井智恵子
委員	東京都立成瀬高等学校	副校長	小川直哉
委員	東京都立王子総合高等学校	校長	仁井田孝春
委員	日本工業大学駒場高等学校	教諭	友利麻衣
委員	京華商業高等学校	教諭	小口浩史
委員	ハリウッド美容専門学校	キャリアセンター長	橋田修
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	小林一人
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	宗川良子

あとがき

はじめに、令和三年度作文コンクールで入選された生徒及び学生の皆さんには、心よりお祝い申し上げます。また、作品を応募してくださった生徒や学生の皆さん、御指導いただいた先生、厳正かつ公平に審査していただいた選考委員の皆様、さらには御後援いただいた東京商工会議所の皆様には、心より感謝申し上げます。

さて、今年度応募のあった作品の特徴として、令和二年から続くコロナ禍により、職場体験やボランティア活動等の学校外での活動が制約されている中、授業で学び得たことや将来の夢に関する作品が多く、今年度開催された東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会に関する内容を記述した作品も見受けられました。また、イラストの部に応募のあった作品には働く喜びをイメージしたものが多く、どの作品も豊かな表現力で描かれていました。

この入選作品集が会員のみならず広く活用され、文字通り「明日に生きる」活力となることを切に願っています。

なお、このたびの入選作品集を発行するにあたり、出来る限り原文や原画を尊重して掲載していますが、人権上の配慮等が必要な場合には事務局の判断において、その趣旨を損なわない範囲で字句を修正しています。

結びに、生徒や学生の皆さんが作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢を実現するきっかけの場となるよう、来年度も本会の作文コンクールを実施します。会員校の皆さんから、より多くの作品が応募されることを期待しています。

明日に生きる　第三十二号

―作文コンクール入選作品集―

令和四年三月一日　発行

発　行　東京都産業教育振興会

〒一六三―八〇〇一　東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電　話　〇三―五三二〇―六七二九

印　刷　株式会社小薬印刷所